

芝蘭堂のオランダ正月

1795年1月1日*

レイニアー H.ヘスリンク 著

矢橋 篤 訳

*この論文の基である英語版は、上智大学出版 *MONUMENTA NIPPONICA* (第50巻、2号、1995)に掲載されました。この度、同編集部から許可を得て、その日本語版を出版することになりました。

はじめに

1795年元旦の朝、駕籠四挺の小さな行列が、江戸番町の幕府薬園から出て来た。この薬園は、將軍家侍医たちの要求により、騎乗弓射の練習場に隣接した空き地に設けられたもので、現在は靖国神社に帰属する土地になっている。¹⁾ 駕籠に乗っているのは、いずれも西洋植物学導入に貢献した者たちである。行列は江戸城の外堀沿いの道を進んで来たが、そのうち二挺は幕府御典医の駕籠で、漆塗りの外装と側面の葵紋によって、すぐにそれと分かった。先頭から三番目の駕籠は、その家紋から、1787年から1793年にかけて老中職に在り、十一代將軍家斉の右腕となって力を揮った白河藩主、松平定信(1758-1829)の家臣のものに違いなかった。定信はこのとき、幕政の中樞から退いてはいたが、依然として幕政に隠然たる影響力を保っていた。

最後尾の駕籠は他の三挺に較べて、かなり粗末な造りであった。この駕籠を警護する侍たちがいなかったら、その駕籠が士たちの乗物にこれほど近づくのは僭越に映ったかも知れない。駕籠に乗っている者が士分でないことは、その中を覗いて確かめるまでもなかった。そして、江戸湾の方向に進むこの行列をわざわざ見る者があれば、最後尾の駕籠に乗る者が幕府に関わる何か問題があったことは推測できるはずである。

実際その通りであったが、それは稀な問題であった。1783年1月、伊勢

から江戸に米穀を輸送中の神昌丸は烈しい嵐に遭遇し、帆柱と方向舵を折り、航路を外れてしまった。天候が回復してみると、十七人の乗組員は黒潮に乗り北へ向かっていた。定期的な降雨と積荷の米のお蔭で、七箇月に及ぶ太平洋漂流の果てに、アリューシャン列島のアムチトカ島に漂着した。

これらの乗組員の冒険をここに再現するには紙幅が足りない。彼らは極限の根気をもって、筏一隻を仕立て、五年後にカムチャツカ半島に到着した、と言うに留めよう。²⁾ 乗組員一行を率いたのは、船長大黒屋光太夫(1751-1828年)であった。

フランス人旅行家 J. J. B. ド・レセップスは、1788年にカムチャツカでこの光太夫に面会し、次のように述べている。

一般の日本人に較べて、光太夫は際だって有能で、世に出るべき存在であった。このような状況は、彼の陽気な気質や穏和な性格ほど重要なことではなかった。彼は洞察力があり、相手が伝えたいと思うことに即応できる驚くほどの理解力を備えていた。彼は好奇心が旺盛で観察力にも抜かりがなかった。彼は見聞したあらゆること、彼の身の辺の出来事すべてを詳細に記録に残しているそうである。彼の応答は概して明るく飾り気がない。彼は隠し立てをしたり、遠慮することもなく、誰のことでも自分の思いのままを率直に語る。³⁾

オホーツク、ヤクーツクを経由し、1789年日本人一行はようやくイルクーツクに着いた。その頃には、アムチトカ逗留中被った苦勞により、またシベリア越えの強行軍がたたって、十七人のうち十二人が死亡していた。イルクーツクで、光太夫はロシアの植物学者エリック・ラックスマン(1766-1803年)に面会し、その援助を得て、生き残った四人の仲間と共にペテルスブルグにたどり着いた。そこで、彼らはエカテリーナⅡ世の謁見を得た後、ロシアの第一次対極東隣接地域使節団と共に日本に送還された。団長は植物学者ラックスマンの息子、アダム・キリロビッチ・ラックスマンであった。1792年9月に北海道に着いたときには、生存者は光太夫を含めて僅か三人になっていた。五人のうち二人はロシア正教に改宗し、それ

ゆえ幸運に乗じて帰国する道を選ばなかったのである。日本に帰国した三人のうち一人は、根室港に着いて間もなく死亡した。

ロシア人が北海道に到着すると、日本の役人は混乱に陥った。貿易の要望書は長崎で受理するとのことで、結局、ロシア人たちは長崎に向かうように指示された。⁴⁾日本人漂流者たち、光太夫と二十九歳の磯吉は日本当局に引き渡されるか、さもなくばロシアに連れ戻されることになった。逗留を選んだ二人は、護衛付きで江戸へ送られた。その所持品の中には、彼らの後見人になったイルクーツク出身の植物学者、エリック・ラックスマンから贈られたシベリアの植物標本も含まれていた。

ラックスマンは、この時すでに、ツンベルグの『日本紀行』を読んでおり、その序論から、日本人植物学者兄弟、桂川甫周（1751-1809年）と森島中良（1754-1810年）を知っていたのである。⁵⁾桂川甫周は將軍家侍医で、西洋の学問に百科全書的な関心を抱いており、森島中良も西洋文化に詳しく、兄甫周を生涯助けた。中良は1793年、松平定信の家臣となった。使節ラックスマンは、ツンベルグの書物に登場する日本人紳士たちが存命ならば会うようにと、父ラックスマンから先述の植物標本を託されていたのであった。驚くべきことに、それは、光太夫の尽力により、ラックスマン父子が宛先とした当の学者たちの手許に届いたのである。

漂流者たちが江戸に着いたのは、帰国して一年後のことであつた。彼らは將軍家斉と松平定信をはじめとする老中たちの拝謁を得た。桂川甫周は、記録係としてこの席に出仕し、1793年に『漂流御覧記』を著した。その後、甫周と中良は、光太夫の体験と見聞に基づいて、ロシアに関する詳細を書物に著す許可を得た。光太夫はカムチャツカ、イルクーツクそれにベテルスブルグでもそうであつたように、幕府においても、人々を楽しませることのできるほどに博識であつた。漂流民に関する二つ目の著作は、1794年に同兄弟によってまとめられ、『北槎聞略』と題された。⁶⁾

しかし、光太夫と磯吉は一般の人々との接触を禁じられていた。彼らは乗船が遭難した時に溺死したことになるので、生存しないはずの人

間をどこに隠すかが問題となった。しかし、光太夫が植物の標本を日本にもたらす役割を果たしたところに解決策があった。将軍家侍医、渋江長伯（1760-1830年）が田安門にほど近い新設の薬園を管理しており、二人の漂流民は彼の監督下に置かれることとなった。

こうして、元日の朝、長伯と甫周はそれぞれ将軍侍医用の先頭の駕籠に乗った。中良は定信の家紋付きの駕籠に、光太夫は町人用の駕籠に乗った。三人の役人は、公には埋葬されたことになっている光太夫を連れ出して、江戸の町人居住地の中心である水谷町⁷⁾で開催される新年宴会に出席させるための許可を予め得ていた。水谷町は京橋にほど近く、東海道を少し外れた辺りに位置し、三方を水路に囲まれた帯状の矩形になっていた。水谷町を取り囲む二筋の水路の合流点には三本の橋が架かっていることから、この辺りは三橋として知られていた。（図8、p.120）別の方向から二本の橋が出合う細長い帯状の土地には、「白魚」の名で知られる魚市場があり、そばには豊倉稻荷神社が建っていた。

上記四人が招かれた新年宴会は異例のものであった。そして、この催しが新年宴会であることを幕府が知っていたかどうかは疑わしい。その宴会が体制破壊にも繋がりかねない西洋で使われている太陽暦に依拠して開催されることを把握していたならば、役人たちも光太夫を薬園から連れ出す許可は出さなかったであろう。

1795年元日は、蘭学者大槻玄沢（1757-1827年）が、幕府の不興を招く危険を冒すこともいとわない友人や蘭学研究者たちを招いて行なった、初めてのオランダ新年宴会の日であった。当日の午後、江戸各所の蘭学者たちは、玄沢が主宰する芝蘭堂での宴会に出席するため水谷町に集まってきた。

1795年には、玄沢はすでに日本国内におけるオランダ語の翻訳者、語学教師の第一人者であった。彼は、現在の岩手県一関市の出身で、医者大槻玄梁の子としてそこで育った。玄梁は早くからオランダ医学を実践していたが、1769年、息子を一関藩主田村侯付医師、建部清庵（1712-1782年）の許に送って学ばせた。⁸⁾ 玄沢は当時まだ十二歳であった。九年後、清庵は

当時最も著名な蘭学者の一人と目された杉田玄白（1733-1817年）の許に玄沢を推挙した。⁹⁾ 1778年、二十一歳になった玄沢は、清庵の息子で十五歳になる亮策と共に江戸へ向かった。亮策は、後に玄白の娘婿になり、杉田家の嗣子となって伯玄を名乗り、この名で知られることになるが、ともあれ一関出身のこの二人は内弟子として、玄白の私塾天真楼に入塾した。後に、玄白はこの傑出した塾生について次のように記している。

この玄沢という人の性質を見ると、凡そ物を学ぶには、実地を踏んでつきとめないと承知しないし、心に徹底しないことは言うことも書くこともしない。豪気という気性は薄い、が、すべて浮いたことを好まず、和蘭の科学の勉強には生まれ得た才を持った人である。私はその人物と才とを愛して、つとめて指導し、後に直接に良沢翁にもまかせて、蘭学を勉強させたところ、果たして一生懸命に励み、良沢もその人物を知って、この学の真髄を伝えたので、程なく和蘭書を解することの要領を会得した。¹⁰⁾

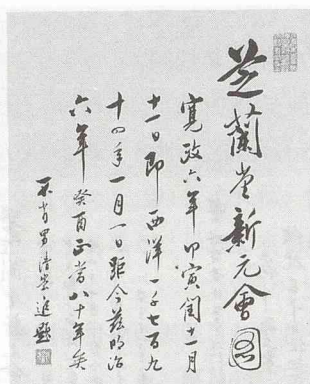
玄沢の宴会には二十九人が出席した。勿論、全員が駕籠を使って水谷町へやって来たわけではない。例えば、玄沢の直弟子の多くは師と同居していたし、その他に歩いてやって来る者もいた。しかし、蘭学という新しい世界に開明的だった大名お抱えの医者たちは駕籠に乗って来たのである。そういうわけで、午後半ばを過ぎる頃には、水路を挟んで芝蘭堂の対岸には、十挺以上の様々な駕籠が停められていたことであろう。屋敷の庭や裏口には、この倍ほどの六尺たちが主人たちを乗せて帰る時刻まで待機していたであろう。客人や供回りをもてなす膳部の費用や品揃えは相当量に上ったであろう。そして、この機会をとらえて後世に残る記念すべきものにしようと、絵画が作製されることとなった。それは二百年を経た今もなお、現代人の目にも耐え得る厳密性を以って、このとき江戸で初めて試みられたオランダ新年宴会の模様を再現しているのである。

「新元会図」の構成

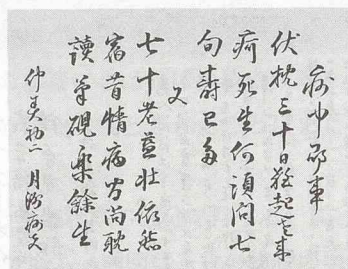
その絵は「芝蘭堂新元会図」と呼ばれ、芝蘭堂における新年宴会の絵図である。同図は、早稲田大学図書館が所蔵しており、¹¹⁾ 1994年に洋学文庫の中から「大槻玄沢関係資料」として他の諸文書と共に重要文化財の指定を受けた。(図1) これは、蘭学関係の書籍にしばしば掲載されるものの一つであるが、単独で本格的な論文の研究対象とされたことはまだない。¹²⁾

同図は掛軸に表装されており、外縁の表装台紙の部分を除くと、幅127センチメートル、縦140センチメートルである。同図は三枚の横長の画紙から成り、その幅は上段部のものが40センチメートル、中段部が45センチメートル、下段部が55センチメートルである。上段部を見ると、この部分は1873年の作であることが読み取れる。(画讃1) この年に、玄沢の次男、磐溪(1801-1878年)が中段、下段部を所持していて、1827年に亡くなった父玄沢がその二箇月前、病床で書き残した絶筆を上段部に張り合わせ、表装し直したものである。¹³⁾ (画讃3) この再表装は二つの理由から行なわれた。その一つは、初めの表装の傷みが激しく、絵そのものが相当の被害を受けるところまで進んでいたことである。二つ目の理由は、明治政府が1873年元日より西洋暦の採用を始めると公表したとき、同図はその新しい意義をすでに先取りしていたことである。この機会を記念して、磐溪は父からの伝承品を修復、復活させ、日本において西洋暦が公に用いられる初日に合わせ、大槻家において新年宴会を開いたのであった。¹⁴⁾

本稿は同図を構成する中段、下段部を主に扱うこととする。よく見ていくと、これらに用いられている二幅の画紙にいくつかの疑問点が認められる。まず第一に、なぜこれらの二枚の幅に差があるのだろうか。同図が制作されたとき、違幅の画紙が用いられたとは考え難い。しかし、この疑問点は、再表装に当たって、現在中段部となっているが、初め上段部であった部分の傷みが激しく、うまく復元できなかったために、画讃の部分が損なわれないようにして10センチメートルほど切り取ったと仮定すれば解決



画讀 1. 芝蘭堂新元會図の序文
(図4、p.110参照)



画讀 3. 大槻玄沢の七言絶句
(図4、p.110参照)

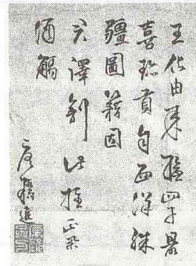
できる。同図の中段部の右上端に、湿気による傷みは今でも残っている。

第二に、中段部の画紙の左上部には、さらに別の疑問点が見られる。中央部に向かって画紙の左端から18センチメートルほどのところに、入念に修復したとみられる断裂線が中段部画紙全体を縦断する形で残っている。さらに、中段部左端上部には、序文と二連の七言絶句が別の画紙に書かれて載せられている。¹⁵⁾ しかし、その内容の趣から、同図とほぼ同時期に書かれたと見るのが妥当であろう。別の紙に書かれた漢詩は、同図が最初に表装されたときに貼り合わせられたのかも知れない。そしてその時期は、十八世紀の終わり頃と思われるが、ちょうど1795年ということもあり得る。

第三に、同図の起源を初期の段階に遡ってその特徴を見ることができる。中段部画紙の下端と下段部画紙の上端の継ぎ目をよく見ると、二種の線が中段、下段部にかけて走っているのが認められる。断裂のない線と、やや見極めにくいものの、微かな断裂がある線との二種類である。断裂がない線は、明らかに後に描かれたものである。それには、右端に載せられた杉田勤の短い詩や、中央部の唐橋進の画讀も含まれている。¹⁶⁾ (画讀8) 断裂がある線の存在は興味深い。それは同図が二段階にわたって継ぎ貼りされたことを物語っている。制作者は同図の中段部と下段部との接合部を

ぴったり合わせるように細心の注意を払ったものの、二箇所だけずれが生じた。すなわち、床の間の最左端を描いた線と椅子に腰をかけている人物の袖のしわを描いた線である。(図2、図3)

第四に、このような点に加え、「蘭学会盟引」と題する玄沢の撰文による、同図中最長の漢文の各行の末尾が中段部の下端で揃っていることをも考慮すると、この漢文を書写した岡田甫説は、制作者が中段、下段



唐橋進の画讀 8

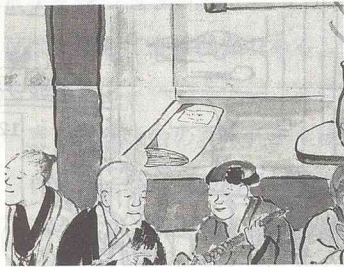


図2. 床の間の左端

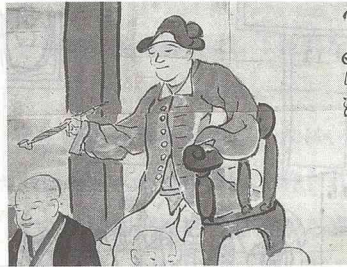


図3. 袖のしわ

部を接合する以前からこの制作者と密接に連絡をとって作業を進めていたに違いないことが挙げられる。¹⁷⁾ 両者は共に芝蘭堂の内弟子であったことから、書写と描出とを分担して各々作業を進めて来たのであろう。さらに、次に見るように、同図についてはそれまで述べられてきたことに反して、宴会の開催中に即席に描かれたものでは決してないと推察される。逆に、断裂ができていたり、書写する人物と画家との密接な協力のあとが見られることから、十分練られた「絵解きの可能な絵」であることが分かってくる。必要なのはその鍵を見つけ出すことである。¹⁸⁾

第五に、先にも示したように、同図にある画讀の書写は同図の制作とは別の段階に行なわれたことである。従って、画讀と関連してその名前が登場する人物が必ず宴会に出席していたとは限らない。このことは、画讀6で、木邨貞公幹(1776-1841年)が「本日は、享和元年十一月二十八日な

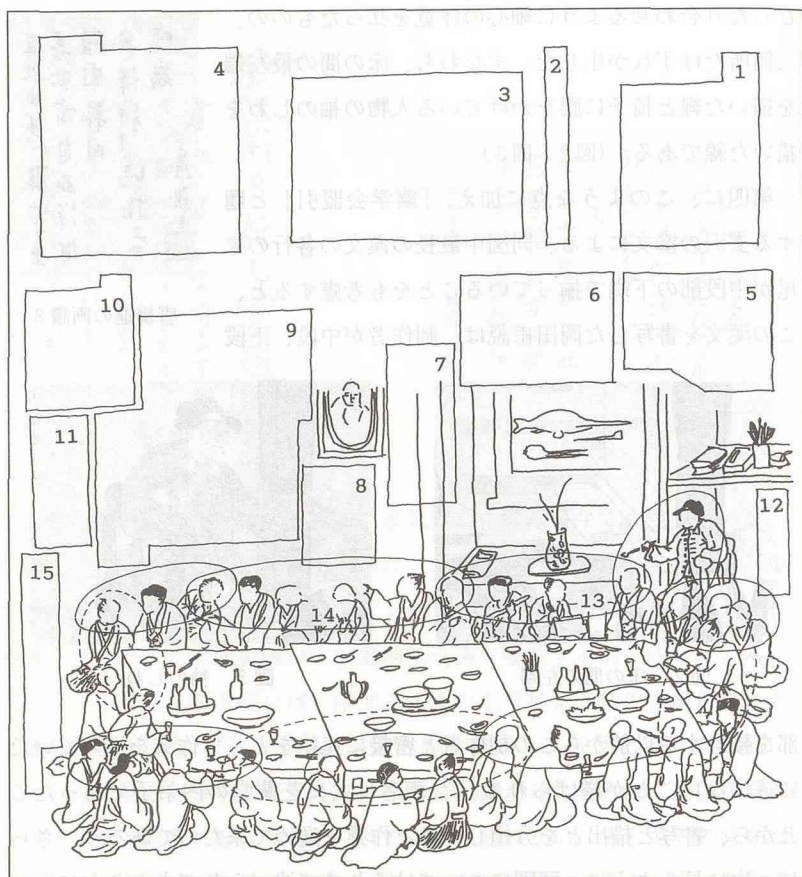


図4. 新元会図の略絵及び画讀番号

り」と記していることから容易に分かる。¹⁹⁾ さらに、続けて、
 宴会たけなわとなつて、先生は立ち上がり、壁に掲げられたこの図を
 指して言われた。「図の中には、このような空白部分があります。こ
 れはあなたの寄稿を待ちわびているのです。」と。²⁰⁾
 ここには、1802年の新年会の漢詩も入っている。木邨貞公幹は伊勢国市
 場庄出身で、初期の蘭学者が殆んどそうであったように、医者であり儒学
 者でもあった。1799年から1802年にかけて、彼は天真楼に入門しているが、

玄沢の教授をも受けていたことは明らかである。²¹⁾ 彼が生国の伊勢に帰省するため退塾する直前に、この図に撰文を寄せることを許されたという事実がある。²²⁾ 従って、同図と1795年の新元会の分析において、木邨の撰文の役割は限定されたものでしかなかろう。

画讃8、唐橋進の撰文についても同じことが言える。この漢詩については、同図の中段、下段部が接合された後に書かれたものであることは、すでに見てきた。日付が記されておらず、また唐橋という人物については、この画讃を寄せたこと以外何一つ判っていないこともあって、今後の研究の成果を俟つ他ない。

同図に関して直接関係のある二つ目、そして最後の漢文は、下段部左端のものである。

芝蘭堂新元会の宴は、冬至後十二日目に開催されました。これは、西洋暦によれば年の初日に当たります。私の如き者まで出席を許されました。宴、いよいよたけなわとなり、一堂にご列席の皆さまから盛会の模様を絵図に描くようにと要請されました。私は固く辞退したのですが、断るに断りきれず、稚拙な技量が露見するのも顧みず、このように仕上げた次第です。会同の皆さまの御芳名の片隅に我が名を記すことを光栄に存じます。

同図を制作したこの「伊勢国住入市川邨」という人物は、ごく控え目に、同図の最下端にその名を記した。(図14、p.138) もちろん、その時代や場所を考慮すると、自分の名を記すことは僭越であるが、オランダ絵画の伝統の影響かもしれない。しかし、以下に見るように、市川岳山(1760-1847年)は、その時代においては危険とも言える自由な気質を備えていたが、幸いにも、巧妙に老年まで生き延びることができたのである。²³⁾

以上見てきた同図に関する前置きを締め括るにあたり、同図並びにその起源に間違いなく関わる画讃は二点のみであろう。一つは大概玄沢の撰文で、その弟子岡田甫説が書写したもの、他の一つは同図の画家、岳山の書いたものである。新元会の当日(あるいはその数日後に)書かれたものでは

ないとの証明ができない画讃5、7、11を除いて、掛軸上の他の全ての画讃は1795年の新元会とは直接関係を持たないものである。それ故、同図及び同図に描かれた人物を特定する鍵は、画讃の中には隠されていないであろう。このことは、同図の外観的特徴に関する以上の見解から得られた最も大切な結論である。従って、この絵図の本質を理解するために、別の接近方法を講じなければならない。

オランダ正月

江戸時代を通じて、日本国内でのオランダ人の滞在地は、長崎湾の出島と呼ばれる小さな島と、将軍への拝謁の年次旅行（1790年まで）「江戸参府」に限られていた。オランダ人商人たちは、滞在中どのような場合でもキリスト教徒であることを表わすことは許されなかった。1641年に彼らが平戸から出島に移された直接の理由は、商館の正面に掲げられた年号であった。西洋の年号は便利であるが、西洋文明と持ちつ持たれつの関係にある宗教の、唯一の中心人物の誕生した年を「わが主」の御年、即ち西暦元年と勝手に決めたものであり、幕府の役人は1612、1618、1637、1639年などという西暦表記は無礼であると、その建物の取り壊しを命じた。もちろん、日曜日を公の祝日とすることも、隔離された出島でさえ禁じられた。これは通詞、守衛、大工、調理人、水運搬人、売春婦といった出島に出入りする者たちがキリスト教の菌に感染しないようにするためである。このことは、イースターやクリスマスにも、さらに厳しく適用された。哀れなオランダ人商人たちは、正月以外にはもはや祝うべきものはなかったのである。

西暦によっても当然そうである一月一日には、出島のオランダ商館長は通詞全員を招待することを許され、通詞たちは贈物を携えて、新年の挨拶を述べに朝から訪ねて来たであろう。次に示すのは、『オランダ商館長日記』から任意に選んだある年の記述である。

1737年1月1日、土曜日。今朝もそうだったが、昨晚は雉、鶏、鮮魚

などたくさん品の品々を新年の贈答品として、乙名、目付、大通詞、小
 通詞たちからもらった。最初に門番たち、次いですでに先に述べた他
 の日本人たちがやって来て、新年の祝詞と、旧年よりも貿易の実の上
 がる時期が到来することを希望すると述べた。全能の主が彼らの希望
 通り、また当社の利益のため、それをもたらしたまえ。そして、本年
 も当社に大きな恵みを与えたまえ。また、実害の多い新しい通貨の暗
 雲を一掃し、〔最近制度化された〕諸改変を取り除き、自由貿易の太
 陽を再び照らしたまえ。

さらに、私どもは、上記の一団の人々をもてなすのに、終日夜遅くま
 で過ごした。その頃になると、別れの挨拶ができないのか、したくな
 いのか、その場から逃げ出して、やっと従者の助けを借りて家路に就
 く者もいた。こういった宴会での日本人の友人たちの楽しげな様子に
 は、まったく驚いてしまう。私にとっては、敵対者というよりは、友
 人か兄弟のように思えた。²⁴⁾

日本側にも、1700年頃から始まったと思われる年始の年次祝賀会につい
 て触れた書物や日記が数冊現存する。²⁵⁾ 年始の祝賀会は、長崎の地役人
 の多くにとって、西洋の日常生活を垣間見る少ない機会の中でも絶好の
 のであった。先に述べた森島中良は、『紅毛雑話』（1787）で次のように記
 している。

冬至より十二日にあたる日を以って、彼国の正月とす。これを「ヤ
 ニュワレー」という。長崎出嶋に旅宿の蛮人、訳官（つうじ）をまね
 きて酒筵をまうく。ことに花麗をつくすとなり。家兄の社友大槻玄子
 云。²⁶⁾

テーブルクロス、椅子、フォーク、ナイフ、スプーン、皿、テリーヌ鉢、
 ガラス器等は来客たちの目を奪ったことだろう。²⁷⁾ 中良による、このよ
 うな料理の一覧は続く。先ず最初は、「パステイソップ」(pastijsoep)、ブ
 イヨンスープ。²⁸⁾ 次に、魚料理三種、すなわち煮物、揚げ物、焼き物。
 次には、焼肉、豚肉の揚げ物、それに、煮込み料理と人参、ほうれん草を

添えたカツレツ（切身肉）。その後、食事はまた初めから始まったかのように、焼羊肉、鹿肉、鴨肉、海老スープが記載されている。それから、デザートに菓子、パイ、それに小さいパンケーキが酒類といっしょに供される。食宴を締め括る料理は、煮たりんごに巻菓子を添えたものである。²⁹⁾ 誰もが心ゆくまで飲食を楽しんだ後は、商館長から通詞たちに余ったご馳走を贈るのが慣わしであった。通詞たちは祝宴を続けるためにそれらを家に持ち帰るのであった。

大槻玄沢は、ここでは中良への情報提供者として引用されているのだが、『紅毛雑話』が出版される前年に長崎に赴いている。彼は、1785年11月8日に江戸を発ち、12月16日に長崎に着き、1786年4月24日までそこに滞在していた。この期間、彼は日記『瓊浦紀行』をつけ、³⁰⁾ オランダ新元会を次のように記載している。

〔天明五年十二月〕二日朝晴、朝飯後平戸町へ行。³¹⁾ 和蘭正月也。

後藤、高木等ノ家内來ル。板ノ間坐舗、コロトターフル〔大テーブル〕大小通詞並ニ出島乙名ナリ。酒宴至丑刻、音曲也。坐舗ハ料理其外ノ調度、蘭ノ通ナリ。投宿ス。³²⁾

オランダ商館長日記には、この年の新元会に触れた記載はない。何か訳があつて、商館長がその年は新元会を開くことを拒んだのかも知れない。そのような宴会は不必要な出費を招くものだという考えのオランダ商館長も、ときにはいたのである。

『瘍医新書』と『六物新志』

興味深いことに、玄沢の長崎行とこの図とを結びつけるものが他にもある。まず、玄沢の長崎行きの主な目的は、ほぼ七年の間、彼が研究して来た一冊の書物の翻訳に関して、オランダ語通詞の援助を確保することであった。その書物は、ロレンツ・ハイステル（Lorenz Heister, 1683-1758年）³³⁾ が著した医学教本（*Heelkundige Onderwijzingen*）である。1770年、玄沢の師杉田玄白は、吉雄幸作からこの書の写しを受け取っていた。幸作は、玄

沢を1786年にオランダ新元会をその邸宅で楽しませた通詞である。玄白は医業に忙殺され、自ら翻訳に携わる暇がないので、最も有望な塾生にこの大仕事に挑むように指示したと言われている。ちなみに、この書物は、玄沢が入手した時点でも、ヨーロッパでまだ使われていた。

1785年の段階では、翻訳はまだ完成にはほど遠く、玄沢は自分が欲している援助を得るには長崎に行くしかないと思い至ったのである。³⁴⁾ 彼は期待していた、あるいはそれ以上の助力を得ることができた。彼の通詞仲間へは、恐らく、師である杉田玄白や前野良沢の紹介状もあったろう。一方、彼の友人であり研究仲間でもあって、後に福知山藩主となる朽木昌綱(1750-1802年)が資金を提供した。³⁵⁾ そして、玄沢自身がその頃仙台藩の藩医に補せられたことと、工藤兵助(1734-1800年)が大通詞吉雄幸作宛に紹介状を書いたことが、長崎にいるオランダ語の専門家たちに好い印象を与えたに違いない。³⁶⁾ ともかく、玄沢は通詞の家系、本木家に逗留し、数回にわたって出島訪問も許されることになった。

玄沢は長崎でオランダ語を学ぶに当たり、いかなる場所にも漏れなく足を運んだ。彼の日記にはオランダ語のベルグ(berg)、「山」もしくは、ロンデ・ベルグ(ronde berg)「丸山」を訪れる記載があるが、これは「丸山」、長崎の遊郭であり、1786年2月4日、6日、14日、15日、28日、同年3月、7日、11日、17日、18日、22日、の日記に記されている。おそらく、彼は愉しみと仕事を兼ねてそこに通ったであろう。丸山には、オランダ人を慰める「阿蘭陀行」という女性がいて、中にはオランダ語をうまく話す者もいたのである。³⁷⁾ 彼女たちは、オランダ人について、さらにオランダ人の罹る病気についても、貴重な体験や知識を持っていた。これらの情報は、玄沢が用いた方法以外では、いかなる学者にとっても入手は困難であつたろう。例えば、1793年に問答形式で書かれた『大西徴瘡方』、玄沢の著した梅毒に関する書物の情報源の一つを探ってみるのもいいだろう。

さて、玄沢が江戸へ戻るころ、通詞の一人、石井恒右衛門(1743年生)が通詞の職に飽きたのか、江戸に出て一旗揚げることを決意した。これは、

当時の人間にとっては勇気の要る決断であった。玄沢の励ましや、玄沢のカリスマ性によるものかも知れない。玄沢はこの貴重な人材を引き連れて、やり残していたハイステルの著作の翻訳に取り組もうとしていた。これが完成を見た1790年、大概玄沢は当時の翻訳の第一人者となった。³⁸⁾

このハイステルの著作のオランダ語版は玄沢が翻訳の原本としたものであるが、その口絵には著者の肖像画が銅版印刷で収載されている。これは、同図の中で、芝蘭堂の壁に掛けられている肖像画の原画に間違いなさであろう。³⁹⁾ その詳細を巡っては様々な論争が展開されて来た。すなわち、西洋医学の祖ヒポクラテスか、それともハイステルかである。⁴⁰⁾ 玄沢の日記に、彼が1799年に初めてヒポクラテスの肖像画を見たことと記していることはさて置き、同図の中に、中国の伝統学問に対する痛烈な批判を寄せた玄沢が、その辞句に並べてヒポクラテスの肖像画を掲げるであろうか。⁴¹⁾ 玄沢は古代中国の医学を厳しく批判して、そのすぐ側に古代ギリシャの名医ヒポクラテスの肖像画が描かれているとすれば、この「芝蘭堂新元会図」において玄沢の文章に矛盾してしまうだろう。そのことからだけでも、その肖像画はヒポクラテスではない、と言えよう。

同図に描かれている肖像画は左を向いているが、ハイステルの書物にある銅版印刷の肖像画は右向きであるから、口絵は芝蘭堂に掛けられた肖像画のモデルとは考えられない、との否定的な見方もある。しかし、玄沢の弟子の一人、画家の司馬江漢（1747-1818年）が師から与えられた情報に基づいて、銅版印刷を試みていたことは確かである。玄沢自身も、オランダ製の世界地図を見事な銅版印刷で複製した『地球全図略説』（1793年）について次のように述べているからである。

君嶽江漢氏、素丹青ヲ善クシ、兼ネテ技巧ヲ好ム。嘗テ荷蘭之馨ヲ慕ヒ、彼之舶スル所ノ、奇器図画の類、模倣擬制スル者、尠シト不為。
〔中略〕君嶽嘗テ其書ヲ読ミ、其法ヲ伝ヘント欲シ、余ニ就キテ之ヲ磋ス。往歳彼ノ銅版鏤刻之法ヲ考究セント欲ス。乃チ余ニ其説ヲ問フ。以テ之ヲ造意シ、銅鏤ヲ創製シ、以テ諸レヲ世に示ス。観ル者感



図5. ハイステルのラテン語版の口絵

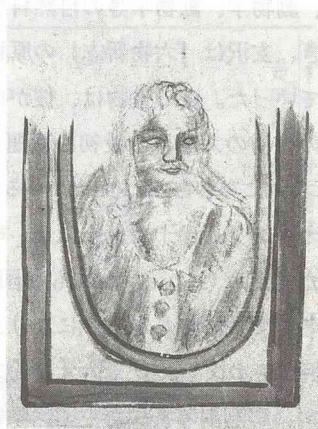


図6. 新元会図の西洋人肖像画

賞セザル無シ。⁴²⁾

日本では高い評価を受けた銅板画を、江漢がどのように作ったのかは明らかでないが、玄沢が、十年以上にもわたってハイステルの著作の翻訳に関わり、著作者がいかに遠い存在の人間であっても、実質上、西洋医学の師と仰ぐ人であったことを思い併せると、彼が江漢に、芝蘭堂の壁に掛けるためのハイステルの肖像画を制作するように指示するというのは十分にあり得ることである。⁴³⁾ 出来上がった肖像画が逆向きになっているのは不思議ではない。(図5) 銅版画は印刷すると、肖像画を鏡に写したときの映像となるからである。そして、口絵の肖像画は壁に掛けるには小さすぎるので、尺度を拡大して再処理しなければならない、ということも認識しておく必要があろう。次に、口絵の肖像画では、ハイステルは十八世紀の典型的なかつらをつけており、また楕円形に縁取りされているのが分かる。これらの特徴は、芝蘭堂新元会図に今なお確認できる。⁴⁴⁾ (図6)

玄沢の長崎行きと同図との第二の関連性は、彼が長崎への往復の途上、二度大坂に立ち寄って、酒造業を営む木村兼葭堂(1736-1802年)を訪ねていることである。この町人は芸術の後援者であり、愛書家で、また、植物

学、動物学、鉱物学等の自然科学にも関心が深かった。最初に立ち寄ったとき、玄沢は『六物新志』の原稿を兼葭堂に読んでもらおうとその場に置いていった。この書物は、彼が1780年に書き上げていたものと思われる。この書物の六項目の最初の話題（オランダの文献から拾い集めた最新の情報に基づいてこの書物に記述されている）は、「ユニコーン」である。⁴⁵⁾

オランダ人は十七世紀以来、螺旋状の筋のある一角鯨の牙を日本に輸入した。それらは、いかにも異国的で、謎めいた「うにこうる」(unicorn)の名称で親しまれるようになり、おそらく医薬品としての価値のために高く評価されていた。その牙は粉末状にされ、ヘビや虫に噛まれたときの解毒剤、解熱剤等、また中国医学書において、この細長い硬質物体の示唆している、深淵な使用にも供されていた。⁴⁶⁾ 十九世紀の初頭には、この牙は私貿易において依然最も利幅の大きい品目であった。⁴⁷⁾ 玄沢はその著作の中で、「ユニコーン」が大西洋のグリーンランド近海で見られる小型の鯨に過ぎないことを初めて指摘している。この動物に対する玄沢の扱いは、当時かなり合理的であったろう。しかし、六つ目、すなわち最終の話題、「人魚」のように、彼の依拠した情報にはまだ時代遅れのものもあった。

兼葭堂は、ユニコーンに関する西洋の書物も所持しており、玄沢が長崎からの帰途、大坂に再び立ち寄ったとき、酒造業者である兼葭堂は一つの取り引きを提案した。玄沢がこの本を翻訳することに同意するならば、兼葭堂は『六物新志』、『一角纂考』両方の原稿を刊行するための資金を提供しよう、というものであった。若い学者玄沢は即座に同意した。彼はそれまで手書きの原稿を持っているに過ぎなかった。それゆえ、自分の著作を木版印刷にして世に出すことには格別の感慨があったに違いない。三巻本が1788年に印刷され、1795年から売られることになった。⁴⁸⁾ 玄沢の師であり、江戸の蘭学者の長老でもあった杉田玄白は、『六物新志』に序文を寄せることを承諾し、司馬江漢が挿し絵を描いた。⁴⁹⁾ 江漢は、美しい人魚を見開き頁に描写したことを誇らしげに、署名、落款も施している。

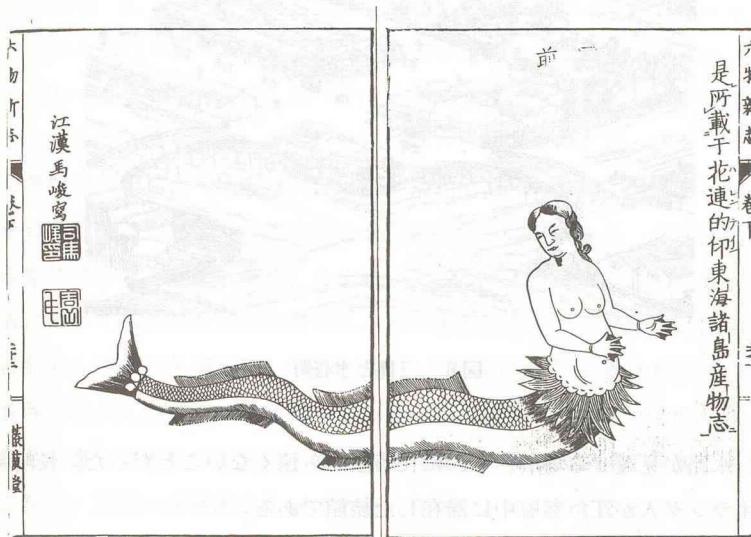


図7. 司馬江漢の女人魚

(図7) 桂川甫周は、その随伴版といえる『一角纂考』に序文を書いた。玄沢は一冊の本を出版することにより、ようやく独立することになった。そして、このことを記念するため、彼は同図の床の間に掛けられている一角鯨の掛軸を作らせたのかも知れない。

芝蘭堂

1786年に長崎から戻った後、玄沢はついに私塾を持つ学者として独立する準備を整えた。彼は十七年もの間、他人の許で勉学を続けてきた。そして今、当時としては破格の条件で仙台藩お抱えを確保した。すなわち、禄百二十石、十五人扶持の士分、それに私塾開設場所の選択権を併せて得たのである。⁵⁰⁾ 玄沢は九月に江戸に戻り、日本橋にほど近い水路沿いの本材木町の狭い土地を選んだ。1789年に、彼は私塾を京橋の向かい側にあたる三十間堀に移し、「芝蘭堂」と命名した。⁵¹⁾ 1793年10月には、再び移転したが、そこは水谷町への角地であった。⁵²⁾ これらに共通する立地条件

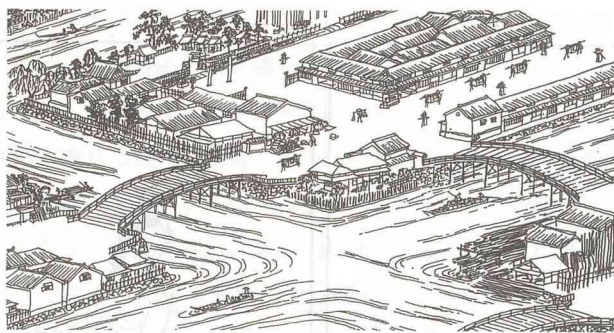


図8. 三橋と水谷町

は、水路が見渡せる場所、それに長崎屋から遠くないことだった。長崎屋はオランダ人が江戸参府中に滞在した旅館である。

玄沢は何事を行なうにもそうであったが、教師となるにあたっても極めて真剣であった。晩年の彼の肖像画を見ると、驚くほど緊張感を漂わせており、真面目な日本人の見本ともいえる吉田松陰（1830-1859年）を想起させるものがある。玄沢は、例えば前野良沢のように、気楽に物事に対処するような人柄ではなく、妥協を許さない厳格な性格であった。しかし、先にも触れたように、彼は、カリスマ性を備えていた。生涯、正道を往くことを確信しているような人物であった。彼の業績が、計り知れないほどのものであったことは認めざるを得ない。⁵³⁾ 若い頃は、のんきな性格であったようだが、当面彼の極めて真剣な側面を見ていかなければならない。次に掲げるのは、『芝蘭堂門人帳』の冒頭の部分である。

本邦ノ技芸者流、其徒ト為リ、術ヲ伝フルヤ、必ズ一軸ヲ作り、以テ載書ニ代。盟ヲ鬼神ニ齊シウシ、戒漏洩勿カルベシ。其之ヲ受クル者、齊戒朝服シ、拝シテ而之ヲ読ム。乃チ自ラ其歲月日時、及ビ其名姓花押ヲ記シ、其下ニ於テ、指ヲ刺シ血ヲ滴シ、其花押ノ上ニ印ス。之ヲ神文ト謂フ。一ニ之ヲ誓紙ト謂フ、其師ヲ示敬シ、其法術ヲ宗尊スル所以ニシテ、而約ニ背カナル也。余世々医ヲ業トス、其方其術、一皆

先師ノ伝フル所、余之ヲ受クル之初、亦其儀ヲ龍フ。而シテ今ヨリ而後、吾門ニ従学スル之諸子ハ、則愿慤篤厚之徒ト雖モ、其ノ故ニ率由セザルベカラザル也、因リテ此一軸ヲ作り、来学之徒、其レ服膺セヨ。謹ミテ其法ヲ受ケ、固ヨリ其術ヲ守リテ敢違フコト莫レ。⁵⁴⁾

芝蘭堂の最初の入門者は、1786年、福知山出身の有馬文仲であった。おそらく、彼は主君朽木昌綱の紹介を受けて来たのであろう。文仲は模範的な塾生であった。師の講義に耳を傾け、当時日本に流布していたオランダ人についての誤解を玄沢が語ったことを書き留めた。この原稿は1788年には完成していたと思われ、『蘭説弁惑』と題された。⁵⁵⁾ 蓮沼要助は1792年5月11日に入門し、薬用植物やその他一般の植物学について玄沢が語ったことを書き留めた。玄沢はその原稿を『蘭畹摘芳』（1792年）と題している。これは、玄沢の情報源がオランダ語の資料であることを暗示している。⁵⁶⁾

同図の床の間を見てみると、花瓶に蘭の花が描かれているのが確認できる。切り花も蘭であろう。これは、阿蘭陀と芝蘭堂に共通する「蘭」の文字とも関わりがあるであろう。ではこれだけであろうか。これまでハイステルの肖像画、一角鯨の掛軸といった同図に描かれたものは、玄沢の著作や原稿に関連があるということが明らかになってきた。それゆえ、花瓶とそこに生けてある花も、1795年の時点で執筆中だった『蘭畹摘芳』に関わりがあることは明らかである。それが事実とすれば、この蘭の野原の中で、謎解きの鍵を偶然見つけたことになる。

床の間の脇棚には、毛筆と羽根ペンが仲睦まじく筆筒に入っているのが確認できるが、そのすぐそばに、二冊の洋書と一冊の和綴じ本が見られる。同図を解説する鍵は、これらの書物にあるに違いない。これらはオランダ語の本の訳本であり、この会合に出席している蘭学者、特に玄沢によって翻訳されたものである。というのは、玄沢が玄沢自身の私塾で開いた会合だからである。

仮に、このことが事実なら、この鍵は同図の他の全ての鍵穴に当てはまることになる。床の間に置かれた書物を詳しく見てみよう。(図2, p.9)

このような、かしまった場所に置かれた書物には、恐らく大切な手掛かりが隠されているに違いない。事実、そこには蘭学者であれば求めて止まない、謎を解くすべての糸口がある。このいささか奇妙な装丁の書物は、日本風でも西洋風でもない。表紙を上にな置かれているが（西洋風のラベルが貼付されていることから明らかな）、西洋の本にしては綴じ方が違っている。日本流に右綴じ、右開きになっている。しかしそのラベルはそれが日本の本ではないことを示している。同図の制作者はその本の表題については手掛かりを残していないが、翻訳者にとって極めて重要な書物であることは直ちに分かるであろう。すなわち、東洋と西洋が合体した本、辞書である。ちょうどその頃、『ハルマ和解』の原稿が芝蘭堂塾生の手によって完成間近となっていた。⁵⁷⁾ 床の間に置かれているのがその原稿であることは疑いない。⁵⁸⁾

『漂民御覧記』と『北槎聞略』

同図を解く鍵を手がかりに、テーブルの回りに座っている人物群の特定に取りかかろう。これらの人物の、ある特徴に気づく。すなわち、二十九人のうち十二人の頭には毛髪がない。七人が頭巾か室内帽を被っている。真冬なので、これらの装着品が毛髪のない頭を隠している可能性もあるだろう。さらに、三人が帽子のようなものを被っていて、うち二人（椅子に座っている人物とその位置から円を半周した対極点にいる人）は坊主頭であろう。従って、出席者の三分の二以上の人物は毛髪がないことになる。これは彼らが熟年であるからでも、先天性の若年性脱毛症にかかっているわけでもない。僧侶に倣って頭髪を剃るのが江戸時代の医者者の髪型だった。医者によって、同業者のために開かれた会合の出席者の大部分が医者風の風体に見えても驚くことはない。

残りの七人のうち、六人は侍風の丁髷を結っており、他の一人はテーブルの左上の端で酒を注いでいる若い男であるが、髪を後方に櫛でなで下ろしている。この違いははっきりしており、当然、六人は大名の家中に職を

持つ侍であり、若い男は浪人と見做してよいだろう。さらに、彼らの着衣はこの結論が正しいことを裏づけている。すなわち、その侍は袴を着けており、一方、医者のうち七人は、正装の上着、黒の羽織を着ている。彼らは、異なった人数の塊で座っているようである。

すでに見てきたように、蘭学者の著作は共同作業の産物である場合が多い。このことは、蘭学の先駆者、杉田玄白と前野良沢によって作製された解剖学書の翻訳『解体新書』についても言えるが、⁵⁹⁾ また玄沢の著作『蘭説弁惑』や『蘭畹摘芳』についても同様である。芝蘭堂の棚に置かれた鍵は、新元会図がそのような共同作業の班別に構成されている、と理解してはじめて、個々人の特定という謎解きの扉が開かれるのである。幸い、この点に関しても制作者の岳山は明確に描いていたのである。彼は、明らかに観念的に十個の人物群を描いている。分析を床の間の前中央、上座から始めると、蘭の絵柄の花瓶の前に一人の人物が座っている。彼の帽子は後方にずれ、頭髮が覗いている。この人物は医者でも侍でもないと思われる。



図9. ロシア文字

しかし、この人物の特定に惑うことはない。制作者は「新元会図」の中にその名前を記してくれている。その人物はローマ字ではなく、ロシア文字二語が書かれた一枚の紙を手になっている。まるで今書き上げたばかりであるかのように⁶⁰⁾ 紙を掲げている（そのために、見る者の側からは、上下逆さまに掲げられている）。(図9) 最初の語は「イアヌアリ」(January)であり、その下には「ダイコオ」(DAIKOO) らしい綴りの語がある。この奇妙な語は、大黒屋光太夫の姓名の頭二音節以外には考えられない。すでに見てきたように、彼はこの朝、質素な駕籠に乗って水谷町にやって来た。彼は、社会的にははるかに上位に位置すると見做される人々に挟まれて、ここに座っている。もし、制作者がこの特定について鮮明にしてくれなかったならば、このように確信することは困難だったろう。

光太夫の横に、鮮明な日本語（別の手がかり）が書かれており、向かって右隣に座っている人物の署名がある。「流槎漫遊九州外、足跡偏歴三世界」この漢詩には、「萬象」と署名されており、落款は「中良」と読める。従って、森島中良の筆名が「萬象」であることを知らなくても、⁶¹⁾ 落款から彼と断定することができる。その朝、駕籠に乗って江戸城外堀に沿った道を通して芝蘭堂にやって来た四人のうち、二人までが特定できた。他の二人については、光太夫のもう一方の側（向かって左側）に座席位置を特定してよいであろう。そして、光太夫の公式の身請け人である渋江長伯は、幕府における地位の高さから見て、床の間の中心近くに座していると推理してよいであろう。そして、その左側の人物は桂川甫周に違いない。彼は弟の中良よりもやや年長に見える。これで、上座は特定者で埋まった。そして秘密の鍵が、彼が共同作業で進めて来た書物、先に触れた『漂民御覧記』と『北槎聞略』を暗示している。後者は、数箇月前に完成を見たばかりである。

『紅毛雑話』と『蘭学階梯』

次の二つの人物群を説明するに当たって、制作者が、テーブルを囲んでいるすべての人物について、二つの著作や翻訳に携わった人物は、隣の人物群にも属する人物と見做すことができるように、各人物群の端に座らせる方法で座席を配置しているらしい。すなわち、出席者はあたかも環状に繋いだ鎖のように、テーブルの周囲に座っている。（図4、p.110）この配置には、象徴的表現が窺える。すなわち、蘭学者たちは皆、まず協力し合うことが必要であり、オランダ語の本を翻訳する価値については、まだ敵対的、懐疑的だった知識人達に対して、共同戦線を張っていく必要がある、という玄沢の鋭い感覚を立証するのである。このことは、「新元会図」並びに1795年の新元会の真の意味であるばかりでなく、玄沢がその後も数年間にわたって新元会を開催したことの意義と言える。

先にも記したように、森島中良は、オランダ事情全般の入門書ともいう

べき『紅毛雑話』の著者である。先に引用したオランダ新元会についての記述とは別に、この書物にはオランダの地理、タバコ、衣服やかつらに関する記事が書かれているが、そこには、「新元会図」で椅子に座っている人物が用いている道具の絵が添えられており、さらには、玄沢自身の書いた序文も掲げられている。(図10、図11) 従って、次の人物群を構成するのは、森島中良、オランダ風の衣服を着て椅子に座っている人物、⁶²⁾ 大槻玄沢の三人である。玄沢は、

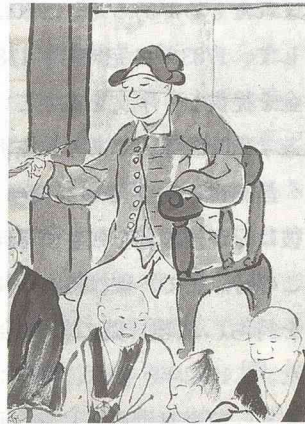


図10. 椅子に座っている人物

ローマ字が綴られている本を手にしている侍に話しかけている人物と特定してよいだろう。『紅毛雑話』から、次の共通項となる『蘭学階梯』に移ることにしよう。そして一つの書物から次の書物へと移行していく中で、玄沢自身が主軸の役割を果たしていることは驚くには当たらない。

1795年当時、『蘭学階梯』は、おそらく玄沢の著作の中でも最も広く読

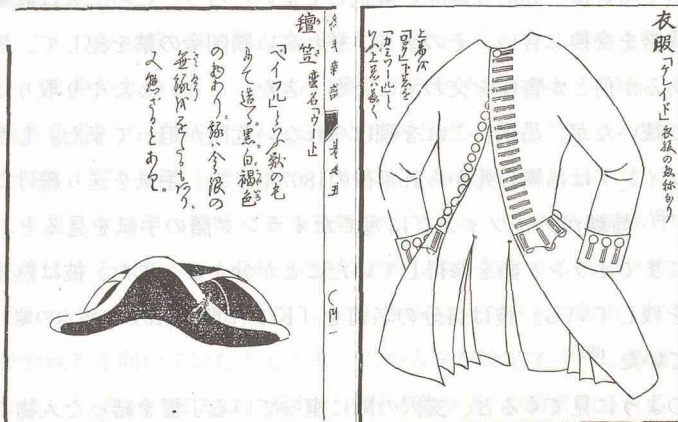


図11. 『紅毛雑話』の挿し絵

まれたものであった。これは、蘭学という新しい学問の総合的な入門書として、1783年に完成し、1788年に二巻本で刊行された。⁶³⁾ 朽木昌綱が資金を提供し、序文を書いている。すでに見てきたように、彼は玄沢の長崎遊学当時の恩人であり、玄沢が丸山で有効に使った資金をも提供していた。

昌綱は、生まじめな蘭学者の中では、一風変わった人物であった。⁶⁴⁾ 彼は兄が後継者を残さず早死にしてしまったため、1787年に大名となった。この時点まで、彼は熱心な洋学研究者であった。幼少の頃から貨幣に興味を持ち、地理、茶の湯、絵画、禅に至るまで、幅広い関心を持っていた。⁶⁵⁾ 1772年、彼は、『蘭学階梯』に掲載された弟子の一覧にもその名が見え、前野良沢の許に蘭学研究者として入門した。⁶⁶⁾ 1779年頃、大槻玄沢と親しくなり、一関出身の若き玄沢は、朽木屋敷に自由に入出入りすることを許された。江戸の上層階級にあった昌綱は、1780、1785、1786、1787年、オランダ商館長の江戸滞在中に、商館長訪問に加わることができた。しかし、昌綱が大名となってからは、商人層との接触を持つことはなくなった。⁶⁷⁾

1780年か1785年の、このような商館長訪問の機会に、昌綱はイザーク・ティツィング (1745-1812年) と出会った。このオランダ商人の貨幣に対する熱烈な嗜好は、知的な趣味と解釈してよいだろう。この二人は収集していた貨幣を交換し合い、その後も、誉れ高い鎖国令の禁を犯して、短期間ではあるが何とか書翰を交わすことができた。こういったやり取りは1789年まで続いたが、昌綱にこれを続けられない危険が迫って来た。しかし、ティツィングは昌綱の死から五年後の1807年まで、手紙を送り続けたのである。⁶⁸⁾ 昌綱がティツィングに宛てたオランダ語の手紙を見ると、驚く程度にまでオランダ語を修得していたことが分かる。また、彼は熟達した筆致を残している。彼は自分の名前を「K Y 左門」(K Yは朽木の略) と署名していた。⁶⁹⁾

このように見てくると、玄沢の隣に座っている丁髷を結った人物こそ、オランダに耽溺し、「蘭癖」としても知られた朽木昌綱であろう。そうで

あるなら、江戸時代の階級において、彼は出席者の中で紛れもなく最高位の客人である。従って、彼にとっては必要に迫られたお忍び行であった。また、彼が玄沢の隣に位置を占めていること、オランダ語の本を手を持っていることだけからでも彼を特定できる。なぜなら、いかに幕府の高位の役人であろうと、昌綱ほどオランダ語に堪能な者はいなかったからである。彼が『蘭学階梯』に序文を寄せていること、また、よく知られているように玄沢との親しい関係からも、彼が出席している可能性は高くなる。⁷⁰⁾

さて、彼らの隣に座っているのは、杉田玄白の養子、杉田伯玄であろう。この人物は、建部亮策としてすでに見て来た。彼は玄沢と連れだって一関から江戸に出て来た人物である。出席している蘭学者全員の中で、玄沢にとって庇護者であり、最も親しい仲間でもあった。伯玄は、玄沢の江戸におけるオランダ医学の恩師である杉田玄白の婿養子で嗣子であり、同時に一関で教えを受けた師匠の息子であったからである。伯玄はまた、『蘭学階梯』の作成に関わっていたと思われるが、その証拠はない。もう一つ、彼を特定する証しが画讃12に見られる。この人物の頭部がこの画讃の署名、「杉田勤」(＝伯玄)、に最も近いところに描かれているからである。⁷¹⁾

杉田玄白と前野良沢

テーブルの最上部(床の間近く)の人物を扱ううえで、注意しなければならない重要な点がもう一つある。蘭学界の草分けとされる二名、すなわち『解体新書』の翻訳者、杉田玄白と前野良沢の存在である。⁷²⁾ 後者は頭巾を被り、黒い羽織を着てテーブルの右下端に座っている人物であろう。美男とは言えないが、愛嬌のある笑顔をしている。広い顎は制作者の腕により、うまく表現されている。1793年頃のものと思われる彼の自画像が現存しており、同様に顎が張っていることから、この人物群の中で彼以外の者が皆後ろを向いていたとしても、この人物を特定するのに躊躇することはない。⁷³⁾ 良沢、または「蘭化」の号で蘭学者の間に知られるこの人物は、広範囲にわたる関心を持った人物であった。1793年にはすでに、ロ

シアの歴史に関する二冊の書物を著していた。『魯西亜本記略』と『魯西亜大統略記』である。彼は、オランダはもとより、ロシアの専門家でもあると言える。⁷⁴⁾

しかし、杉田玄白に関しては少し複雑である。彼が出席していないのであれば、その事実自体、何らかのメッセージを表わすであろうからである。しかし、このメッセージがいかなるものかは分らない。玄白の日記『鵠斎日録』を繰り、太陰暦を太陽暦に換算し、1795年1月1日に相当する日の記載を調べてみると、十巻に及ぶ日記のうち、この日を含むはずの第五巻が欠落している。⁷⁵⁾ 同じ日付の記録を収めている部分について、それに続く数箇年分にわたって検索し、玄白がこの他の新元会に出席しているか否かを確かめてみても、新元会についての言及はないかのように見える。しかし、そう言い切ってしまうのも良いものだろうか。寛政十年十一月二十五日(1798年12月31日)の項に、玄白は次のように記している。「同在宿、星野良悦詮議持参」と。⁷⁶⁾ 星野良悦(1754-1802年)は、1793年に芝蘭堂に入門した人物であるが、広島出身の医者であった。彼は、大工の棟梁が作った精巧な木製骸骨の模型を持参して、玄沢を驚かせたことがあった。良悦が医学に関して論じるために玄白を訪ねたことは明らかだが、その訪問の日付から見て、良悦は玄沢に派遣され、玄白を翌日の宴会に必ず出席するよう説得しに来た、とも考えられる。良悦は説得できなかったのではないだろうか。想像力をいくぶん逞しくしても、玄沢主催の宴会に関わるかも知れない記載はこれしかないからである。⁷⁷⁾ 玄白が、玄沢主催の宴会には一切出席していないと結論せざるを得ない。しかし、なぜ出席しなかったのか。両人が不仲になっていた、とまでは言えない。そうであれば、玄白の嗣子、伯玄の立場は苦しくなっていたであろうから。

しかし、1787年、玄沢が私塾を開いた直後、玄沢とその師との関係の様相は変わり始めた。1787年3月2日のこと、玄沢は突然眼に痛みを覚えた。玄白は翌日処方箋を書いている。⁷⁸⁾ 同月24日、玄白は本材木町まで出かけてこの患者を診察しており、29日にも同じことを繰り返している。⁷⁹⁾

10月31日には、「玄沢発足」との記載がある。これは旅行に出かける、世の中で活動を開始すると言うような不明瞭な表現である。これは医者、あるいはそれに準ずる者として完成したことなのであろう。⁸⁰⁾ 1787年12月31日、玄沢からの手紙を受け取ったと記しており、⁸¹⁾ 1788年2月13日に、玄白は玄沢を訪問している。その十日後には、玄沢が御番医に任官したことを、6月2日には、御側医に併せて任官したことを記している。⁸²⁾ その後は、1803年6月10日に玄沢と清庵が玄白を自宅に訪ねてきた記載を最後に、弟子玄沢についての記述はなくなっている。⁸³⁾ 清庵は一関出身の医師、建部清庵の長男であろう。なお、清庵は玄沢を初めて玄白に紹介した人である。これが『鵲斎日録』における玄沢に関する最後の言及である。しかし後年、1815年に玄白が『蘭学事始』を著したとき、その著書の中で学者としての玄沢に惜しみない賞賛を贈っている。

この問題はしばらく置き、両者の間にいさかやあつれきがあったとしても、双方がそれを蘭学界全体に拡散させないように注意を払っていたと結論すべきだろう。たとえば、玄白の弟子たちは、芝蘭堂での勉強会にはいつも出席した。従って、玄白の養子であり、玄沢の後輩であった伯玄が、両者の関係を円滑にする上で重要な働きをしていたのかも知れない。そして、1795年の新元会でも、伯玄は養父の名代として、玄沢と昌綱の近くに席を与えられたのであろう。玄白は『蘭学事始』の著述に携わるようになると、安逸に流される古老とは一変した働きを示すことになるが、そのことについては以下に見ていくことにする。

『ハルマ和解』再考

つぎの人物群は、桂川甫周と隣り合わせに、向かって床の間左側に座っている人々である。繰り返しになるが、甫周は『ハルマ和解』の人物群を繋ぐ要であると同時に、『北槎聞略』についても同様の人物と見做される。さて、彼はこの辞書にも貢献したのである。この蘭和辞典の草稿は、1792年から数年の間に、玄沢と同道して長崎から江戸に戻った通詞の石井恒右

衛門、稲村三伯（1759-1811年）兩名によって作られたものである。^{84）}二人は玄沢によって互いに紹介された。恒右衛門に対して稲村にオランダ語を教えてほしいとの意図が玄沢にあった。長崎滞在中には、恒右衛門は大通詞西善三郎のマーリンが著した辞書の翻訳計画に関わっていたらしく、この種の仕事を江戸で続けることに強い関心を持っていたのである。稲村は因幡出身の医者であるが、彼の藩主が江戸に滞在する期間だけが彼に与えられた学習時間であった。そのため、辞書を故郷にも持ち帰りたいと希望していた。彼がオランダ語修得に傾けた努力は並々ではなく、後に芝蘭堂四天王（オランダ語に特別な才能ある人）の一人として知られるようになる。^{85）}

この辞書の草稿を校正する次の段階に至った。その作業にあたったのは、美作津山藩医宇田川玄随（1755-1797年）、玄沢の弟子岡田甫説、それに玄沢自身であるが、玄沢は、恒右衛門と三伯はもとより、若く貧しい安岡玄真にも協力を要請している。^{86）}初版の原稿は1795年には完成していたらしく、1796年に印刷された。これは F. Halma, *Nederduits Woordenboek* と題されており、日本語の正式な表題はない。しかし、三伯がこの辞書を『ハルマ和解』と言ったところから、当時の蘭学者たちの間ではその名で知られるようになった。

次の作業は、この辞書の編集に関わった人物と、「新元会図」の中で桂川甫周と隣り合わせに座っている人物群との照合である。甫周の右隣り、丁髷の人物も上座に座っている。しかも、この人物は同図の中心にいて、全出席者の要の役を果たしているかに見える。その整った服装と、満足そうな表情が、彼が然るべき地位を得ていることの何よりの証拠であり、この人物こそ、元通詞石井恒右衛門である。浪人として七年間辛酸を嘗め、玄沢や昌綱の斡旋によると思われる半端な仕事で身過ぎをして来たが、やがて（1793年）中良と同様に、松平定信お抱えとなったのである。

恒右衛門は隣の人物の頭を指しているように見え、その人物は漢文が書かれた扇子で顔を半分隠している。（図12）その漢文は詩経からの引用である。

如月之恒 月のゆみはりのごとく、
 如日之升 日のいづるがごとし、
 これは『詩経』からの引用で、次のように続いている。

如南山之寿 南山のことぶきがごとく、
 不騫不崩 騫けず崩れず、
 如松柏之茂 松柏の茂れるがごとく。⁸⁷⁾

これは、明らかに、誰もが抱く願いを表わしたも

のではあるが、この席では、蘭学という新しい学問が永久に盛んになることを願っているのである。扇子を手にしている人物は、わざわざ月や太陽に関する『詩経』の一節だけを引用している。同図の中で描かれている太陽暦と太陰暦について言及している、と読み取ることは決して牽強附会ではないだろう。⁸⁸⁾

しかし、さらに、「如月之恒」の「恒」は「満ちる」の意で、「弓張り」と読む。それはまた、「つね」とも読める。これは、恒右衛門の頭文字なのである。恒右衛門が指し示しているのは、実は扇子の陰から満ちて来る彼の隣人の坊主頭なのである。このようにして、彼はその人物を示唆すると共に、彼らの間柄をも表しているのである。蘭学者たちの間では、ハイステル著 *Heelkundige Onderwijzingen* を翻訳した玄沢を蘭学界の「太陽」と言い、一方、この本と類似した内容の書物を翻訳した宇田川玄随を⁸⁹⁾「月」になぞらえるのは、当時の洒落だったのである。⁹⁰⁾

今日では、このようなことを言うと、「有り得ない」「思いもよらない」とお考えの方もおられようが、ここに臨席する人々は中国の古典に関しては、完璧な教育を受けており、『詩経』も中国語そのものではなくも、読み下しで暗誦できたのである。扇子に書かれているような洒落を見抜くにも、当時は、そこに秘められた意味を探し出すのに私の要した日数など全く必要なかったのである。ここまで見てくると、同図の制作者市川岳山は極めて巧妙な画家であったことが判る。しかし、洒落の件はまだ終わった



図12. 『詩経』からの引用

わけではない。玄沢が、玄随は自分の鼻の大きさにやや過剰意識を持っていたことを証言しているからである。だが同図では、彼はその鼻を隠そうとしている。1797年に玄随が死去した後、玄沢はこの物故学者を描いたある肖像画について次のように書いている。

是は御顔ふとり過ぎ申し候。失礼乍ら、御目は市川荒五郎に似たり。

御鼻は荻野伊三郎に高麗屋を合わせたる気味合なり。一体、面貌柔和、すべて是といふくせなし。天性寡黙にして多言ならず、言語挙動、婦人に似たり。東海とも号するより友人等、戯れて東海夫人と渾名せし事もありき。⁹¹⁾

玄沢が、その肖像画を描いた人物が玄随の鼻を過大に描いたのだと強調しているとすれば、玄随の側にそれを気にする要因があったはずである。しかし、玄沢は、玄随は死んでしまったので、鼻に関する洒落はそれまでにすべきだと考えた。

次の人物は『ハルマ和解』を代表する五人の人物群の中央に座っていて、この辞書の作成に最も力を発揮した人物に他ならない。従って、この人物を稲村三伯とみてよいであろう。それというもの、玄沢が後になって、三伯について語っていることに、

〔前略〕因州の医官稲村三伯は、学を好みて斯業に篤し。七八年前東遊し、余に就いて西学を受く。然るに生、其の君に請ひし所の年限あり。此翻訳の業、其日月を以て卒業すべからざることを曉り、彼の言辭書の訳語を受けて帰郷せんとし、余に依りて彼のマーリンの翻訳を筆受せんことを乞ふ。余固より短才未熟にして尽く其諸言に通せずといへども、只其一二の知れる所を示せり。〔中略〕白川侯の臣石井恒右衛門（今、庄助）は⁹²⁾崎陽、故との訳官たり。〔中略〕石井が已に此訳語を需む。〔中略〕石井、一年、ハルマの原本を携へ、侯国に行き、遂に功を竣へて、翌歳帰邸して三伯に授く。三伯喜んで安岡玄真等と彼此校讎し、年を積みて全本成りぬ。⁹³⁾

三伯の弟子藤林普山はつぎのように述べている。

海上翁〔三伯〕、江戸客在の日、諸子、蘭文を学ぶも、一書の全訳なし。其辞の明かならざるに係るを悟り、奮って遠西人ハルマ纂輯せる釈詞書を自写し、対訳を石井に親受し、三万許を得て、義弟榛斎字子と校訖し、遂に一部八万余辞を完翻し、寛政八年、始めて活板と為し、三十部を社友に配与す。字を植ゑ、匠を使うこと榛斎子、特に労働せり。⁹⁴⁾

ここで明らかなことは、蘭学者なら誰でも承知していたことではあるが、三伯は（石井と共同して）この辞書の編纂に大きな役割を担っていたばかりでなく、この時期には、膨大な量の原稿を版下に出し、多額の借金も背負っていたことである。彼は借金を重ね、もはや三伯が借金を返済することが不可能と分かったとき、鳥取出身の商人である兄が、彼を苦境から救済しようとした証拠が残っている。三伯も兄も破産を宣告され、1802年、藩当局は彼を江戸藩邸から追放した。しかし、三伯が書物の出版のために負債を負ったことが公になれば、藩自体が迷惑を被ることになる。そこで同藩では三伯が在籍している塾に藩役人を派遣して調査を行なった。⁹⁵⁾「新元会図」にある画讃11の文責は三伯にある。これは中段部にあることからみて、同図を構成する中段部と下段部の紙が貼り合わせられる以前に書かれたものであろう。

残るは、三伯の右側にいる二人だけである。彼らは若く見えるが、そのうちの一人は服装から判断すると、明らかに然るべき収入を得ている医者である。もう一人は、先にも見たように、浪人である。この辞書に関わって来た者たちの中で、この時期に浪人が一人いた。安岡玄真、芝蘭堂四天王の一人に挙げられた人物である。生国伊勢から江戸に出て来た玄真は、早くからその才能を杉田玄白に認められた。玄真は天真楼に入塾し、玄白の娘八曾と結婚し、玄白の嗣子となるはずであった。⁹⁶⁾しかし、玄白翁は玄真の楽天的な態度に不満を抱くようになり、その放蕩生活を責めた。八曾は結婚後ほどなく彼と離縁させられ、玄真は苦節に見舞われる。このような事態がどの時期に当たるのかははっきりしないが、おそらく1789年

から1793年の間であろう。玄真は稲村三伯との友情、それに玄沢の陰の力によって、何とか生活することができた。宇田川玄随は嗣子を持たず、1797年に死去した。彼の家族は玄沢と相談の上、玄真を養嗣子とすることにした。玄真が初めてオランダ語を習ったのは、玄随からだった。⁹⁷⁾

このような玄真の暗い過去が、この人物群の中の最後の人物である岡田甫説に酒を注ぐ彼の銚子に表われていると見ることもできる。甫説は、先に玄沢が同図に寄せた寄稿文を書写した人物として紹介したが、蘭学界ではむしろ目立たない人物で、その出生も死亡も記録には残っていない。彼のオランダ語の知識は相当なものであったに違いなく、このことはそれ以後の新元会で認知されることになる。⁹⁸⁾ 彼が同図で自分が書写した文字の真下に座っているのは、偶然の一致であろうか。

司馬江漢の冒瀆

さて、ここまで、出席者のほぼ半数の人々について特定してきており、そろそろ1795年元日の会合の意味を明らかにする段階になった。玄沢の弟子の一人であろう烏有道人と名乗る人物が書いた文書があるのだが、そのままそっくり玄沢の著作『崑港漫録』に取り込まれているのである。⁹⁹⁾ 原作は「盲蛇」と題され、寛政六年秋の日付である。これは、芝蘭堂における新元会が企画される数箇月前のことである。盲蛇と示されているのは司馬江漢である。彼には桂川甫周の著した『漂民御覧記』の注釈を書いた経緯がある。烏有道人によれば、江漢は、甫周の誠実性にも、光太夫の話の信憑性にも疑問を投げかけ、次のように言っている。

幸太夫は船頭故、一向俗人にて珍談も不知者故、カネール¹⁰⁰⁾は、ムスコヒアの都へ参と心得、よいかげんにおもしろく作られし者と思はる。後の甚しき誹を得る事なれば、先づ外へ御備は御無用に可被成候。¹⁰¹⁾

そして、さらに、火事の話について、火災の事虚言にて、能々考知べし。二階の火事を三階にては不知と云

は、内外共に石・煉土にて作りたる家にて、二階梁は木なり。石にては還て危き事成。天井は皆木にて張たるを、下の火事は二階に及ぶことは不及言。あまり桂川と云人は奇談なる事を云者かな。火事は一家焼なるべし。

さらに、

其外大間違数々有之候。註説いたし御覧に入れ可申候。御上覧の時の聞書、尤桂川の作なれば良才の者迄も真に信じ申候事、扱々気の毒千万なることなり。世人の説に蘭学者は奇談のみを云。人をアザムクと言ば社中一派の病なり。¹⁰²⁾

そこには、江漢は1794年8月14日に薬園で光太夫に面会していることが記されている。¹⁰³⁾ 光太夫は、江漢には強い印象を与えなかったようである。彼は、ロシアでの体験については語るべからずとの幕府の厳命に背くこととはばかって、沈黙したのかも知れない。仮に、江漢の批判はあまり意味がないものとしても、「盲蛇」の匿名作家は、耐え難いほど学識をひけらかし、悪意をもって江漢の批判を否定している。

嘗て彼が人となりを聞くに、天性愚にして頗る奸黠なり。業とする画すら固より工拙の論なく、世にいふ横数奇の諸芸、その片端のみ聞知り、自ら名家を許して人にほこる。〔中略〕然れども鼻先の才気ありて和漢蘭学諸先生にもおりおり出入し、其論説を見過し、聞過し、自ら得たりとして世に誇り、其業を囂ぐの助となす。されども其もと蠢愚の性なるがゆえに、或は博達明識の人に逢ふといへども其弁へなく、口まかせをいひちらし、ひそかに見侮るをも知らず、去とてはなげかわしく気のどくなる者ともいふべし。¹⁰⁴⁾

これらがどこまで真実であるかは知るよしもない。玄沢はそれをわざわざ自分のノートに写し取ったが、原作者の実名は秘匿した。原作者はもちろんこの図のどこかに描かれているのであろう。そうであるなら、匿名ということから、観る者に背を向けて座っているはずである。匿名作者は続けて言う。

蘭学者奇談のみを云ふと世人評するは、汝が如き上わすべりの片言知りのいひちらす事を賢愚ともに噂することなるべし。真の学者は真説くゆへ人かつて怪しまず。「知るものは不知」とや。先づ真の学者はむさと人には説かぬなり。

これに続く部分で、烏有道人は原作の中で、玄沢と甫周に対しては卑屈なほど媚びへつらっている。従って彼は、少なくともある点では、師の代弁者といえる立場にあり、偉大な甫周の発言に対してあえて疑いを投げかけた江漢を攻撃していることは明らかである。このようなことが玄沢の気にかかっていたことは、玄沢の著書『蘭訳梯航』（1804年脱稿、1816年二巻本刊行）にもはっきり表われている。

近時幸ニ此蘭学ト云ふ者世ニ行ハレシヨリ、通俗何ニノ差別ナク、〔中略〕己レガ不学短才モ揣ラズ、仕旧シタル事サヘ知ラズシテ卒爾トシテ此学ニ入りテ其片端ヲ見聞シ。自ラ誇張シテ和蘭流ト称シテ世ヲ誣ルナリ、ココヲ以テ世ノ人其唱フル者ノ精ト粗トヲ択バズ、其志ノ実力不実力ノ論ナク奇異ヲ唱フルモノノヤウニ誹議スル事ト見ユルナリ。¹⁰⁵⁾

さらに、江漢は批判の対象として『漂民御覧記』のみを槍玉にあげていることから分かるように、『北槎聞略』には目を通しておらず、『北槎聞略』が『盲蛇』の中で「目下執筆中にて、公刊が待たれる」と触れられていることも知らないのである。実際、玄沢が蘭学者たちを呼び集め、それに呼応した甫周、中良、長伯が玄沢に協力して、幕府に「光太夫を蘭学者一同に見せてくれるように」と許可申請を出したのは、江漢がこの新しい書物に呈したような批判を押え込む狙いがあったのかも知れない。もし、江漢が光太夫の証言を信じることができないとの態度を取って示し、そのような見解が少しでも一般に受容されることになれば、『漂民御覧記』は將軍が光太夫に接見した際の問答に基づいて書かれていることから見て、將軍の不名誉が生じてしまうであろう。だから、將軍家侍医たちがこの機に光太夫を薬園から連れ出す許可を取りつけたのは不思議なことではない。

ここで、なぜ同図の制作者が、ロシア語で何かを書き終えたばかりの光太夫の肖像を描いたのかが大体分かってくる。それは、江漢やその他の懐疑的な人々に対して、光太夫は甫周や中良がこれまで述べて来たそのままの人物であり、海の向こうの世界では、かのレセップスが褒めちぎっている人物であると示すことであった。繰り返すが、市川岳山は見事な手法で、このような情報を皮肉や厚意を込めて観る者に伝えようと努めているのである。

こうしたことを、江漢自身はどのように考えたのであろうか。彼が面目を失ったのは事実であろう。その後開かれた蘭学者の会合では、江漢に対してあらゆる嘲りの言葉が浴びせられているからである。¹⁰⁶⁾ 岳山は、司馬江漢が面目を失ったその顔を慈悲深く隠してやったに違いない。だが、実際にそうしたであろうか。『盲蛇』の著者が江漢の「鼻先」(彼はさまざまな物を吸い込むのにこの鼻を用いているが)について特に注目して述べているのを覚えておられると思うが、実際に、『コッペル天文図解』に挿入された彼の自画像の、1808年、当年六十一歳の鼻を見ると、際だって高いのが分かる。(図13) まだ特定されていない同図の人物の中には、左端、テーブルの最下端に座っている人物もある。この人物は、鼻と右目だけを観る者にさらして、顔をそ向けている。この人物こそ司馬江漢だと確信できるいくつかの理由がある。

■ テーブルの上端部左隅に、この人物に隣り合って坐っている若い侍は、彼の左にいる医者と話しているように見える。しかし、彼の右手の人差指は反対の方向を指している。市川岳山の書いた撰文を秘かに指し、同図の制作者がここにいると知らせているのである。(図14) ようやく、岳山についても分かりかけてきた。彼がこのような手法を用い、他の出席者とともに自己の存在を永久に残そうとしたとしても、驚くにはあたらない。岳山は、伊勢国出身であるが、ここにきて、どのようにして二つの人物群の要の役を果たしているかが分かる。一つは浪人玄真を初めとする伊勢国出身という共通項を持った人物群であり、他方は絵を描くことに共通性を持

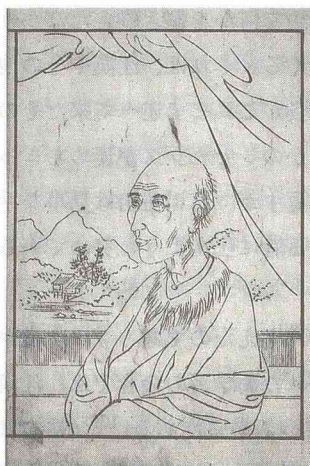


図13. 司馬江漢の鼻



図14. 市川岳山の人差指

つ人物群である。

突然、多くの新たな発見を手許に抱え、同時には処理しきれないほどになってしまった。もし、伊勢出身の者たちがテーブルの左上部に集められているとすれば、正装している医者者を特定することも可能である。当時、江戸には伊勢出身の医者はそれほど多くはいなかった。従って、玄真と岳山との間に座っている人物は、越村図南（?-1814年）とみてよいであろう。もともと、彼は天真楼に入門していたので、その後、芝蘭堂へは正規の塾生とならないまま、足繁く訪ねていた。しかし、彼はこのような立場を補完しようと自己資金を投じ、1797年に玄沢の著作『官能真言』を、そして1798年には『蘭説弁惑』を刊行した。『蘭説弁惑』の原稿は、先に触れたように、有馬文仲によって、その十一年前に書かれていたものである。

また、後者には、隣に座っている岳山による解説図がついており、このことから、この人物群には地理的要因だけではなく、書誌的な要因もあると言える。この著作が、「新元会図」が完成したわずか三年後に刊行されたことに異議を唱えるには及ばない。その出版計画は、同図を描く時点ですでに出来上がっていたかも知れないからである。従って、岳山をこの伊

勢出身の人物群と次の人物群の連結役であると見做せば、江漢は二人の丁番を結っている侍の間に座っていることになる。画家は医者ではないからである。江漢の場合は、他の坊主頭の出席者のように頭を剃っているのではなく、髪がもともとないのである。¹⁰⁷⁾ 以上のようなことから、彼がテーブルの下端にいると見るのは妥当である。彼が、非難を浴びせた人物から遠く離れていることと、芝蘭堂と関係を持つ者たちの順位から見て、然るべき位置である。もう一人の侍の特定については、推理するしかない。この人物が絵師と断定できるのは、おそらく江漢と特定できそうな人物と隣り合っているからである。彼は北山寒巖（1764-1801年）であろう。彼は、御先手与力、すなわち江戸城の門の守衛であり、¹⁰⁸⁾ ハイステル翁の肖像画を描いたことで知られている。¹⁰⁹⁾

結語

テーブルの左下端のあたりに座っている四人からなる、もう一つの人物群がある。次に二人の医者と一人の侍からなる三人の人物群があつて、さらに一人の侍と四人の医者から成る五人の人物群へと繋がって行く。この五人の人物群の端に座っているのが前野良沢である。これらの人物の大多数は玄沢の弟子であろう。¹¹⁰⁾ だが、全員がそうなのではない。まだ他にも出席していたと思われる人物がいるからである。その一人は、石川玄常（1744-1815年）である。彼は1772年、前野良沢の弟子となって、『解体新書』の翻訳に加わっている。1788年には一橋家付の医者となった。その彼が1795年の新元会に出席していたことは十分に根拠がある。その六箇月前に、息子の玄徳と共に長崎屋にオランダ人を訪ねる人々の一員となっているからである。¹¹¹⁾ この時は、江馬元恭（1747-1838年）も同行している。彼の画讀5は同図の右上部に掲げられている。¹¹²⁾ これら二人の人物は前野良沢の近くにいる可能性が高い。江馬は、良沢の親しい仲間として知られており、おそらく良沢の隣に座っているであろう。¹¹³⁾

これら最後の三つの人物群の中で、テーブルの左下端の羽織を着た特定

できていない人物と、右下端の前野良沢の両名の顔だけが正面から描かれている。背を向けて座っている残りの者たちは、不詳に差はあっても、結局姓名不詳の人物である。六人の顔は全く見えない。岳山は、描こうとすれば、どんな人物の相貌をもそれ相応に描写する腕を持っているのだから、彼はそれらの人物の顔を描きたくなかったのか、あるいは玄沢から顔を描かないように指示されたのだとしか思えない。これらの六人は江漢を支持したために、顔を描いてもらえず面目を失ったのであろうか。その場合、良沢の笑顔はさらに意味深いものであろう。すなわち、彼はロシアに関する該博な知識を備えた光太夫を支持していたのかもしれない。

事実がどうであろうと、「芝蘭堂新元会図」は、寛政期の単なる記念写真などではなかったのである。これは玄沢から何を描き、来客たちをいかに配置するかについて全般的な指示を受けた岳山によって示された、蘭学の置かれた状況の描写なのである。

光太夫を巡る論争が、1795年の新元会の出席者にとって、いかに重大なものであったとしても、二百年余りを経過した今、「新元会図」に収まっている人物の目にはそれほど鮮やかに映らなかったであろう別の事象が見えて来るのである。先ず第一に、自らの集団の中に、新しいヒエラルキーを打ち立てようと全国から集まって来た人物群がここにいる。つまり彼らが目指したのは、出自ではなく、実力に基づくヒエラルキーであった。このこと一つをとってみても、日本では先例のないことであり、光太夫が上座を占めている理由を示している。光太夫は伊勢国からペテルスブルグに至り、そこから戻って来たが、その間、帝政ロシア女帝と将軍から謁見を許され、レセプションが洞察して語ったように、極めて高い才覚を備えた人物であった。

さらに言えることは、一見しただけでは分らないが、玄沢の威厳は会堂の隅々にまで浸透している。このような特徴からも、玄沢が鋭い政治家であったことが読み取れる。玄沢が、自由裁量権を得ようと仙台藩当局と交渉に当たった模様については、すでに佐藤昌介氏が述べておられる。

1795年の新元会の準備に当たっても、玄沢は、光太夫の借用に関する幕府との交渉に関わっていたに相違ない。もちろん、そのような記録は残っていないが、玄沢の幕府内での後援者だったと目され、もと仙台藩出身の若年寄であった堀田正敦（1758-1832年）もこの交渉に関わっていたと見てよいであろう。¹¹⁴⁾ 玄沢は、蘭学を成功に導き、学問分野として認めさせるには、蘭学者間の団結はもとより、幕府の支援が必要であることを確信していたに相違ない。江漢の批判の善し悪しはともかくとして、当時幕府に侍医として得難い重要な人脈を持っており、しかも敬愛を集めていた最長老の蘭学者の一著作に対して、江漢が疑問を投げかけたのは当然ながら大きな波紋を及ぼした。玄沢がこれに対抗する武器として、力ではなく策を以って対処したことは賢明であった。彼は江漢に自説を撤回するよう求めず、江漢がその信頼性に疑問を投げかけた当の人物を上座に着かせ、人々の前で江漢を嘲笑しているのである。もちろん、玄沢が光太夫をこの会合に出席させることができたのは、彼が幕府内に有力な人脈を持っていた証しであり、光太夫を出席させることによって、江漢に身のほどを知らしめたのである。¹¹⁵⁾

この絵における玄沢の際だった存在は、彼の師、杉田玄白が会合に出席しない選択をした理由であったろう。玄白は己の（むしろ繊細な）個性に対して、玄沢の持つカリスマ性は強すぎると見たのかも知れない。玄白は晩婚であったことから嗣子はなく、娘がただけである。玄沢には二人の息子がおり、両名とも自らの力で著名な蘭学者になり、次男系列の孫たちも同様であった。¹¹⁶⁾ これらはすべて、新元会の時点から見れば、はるかに未来のことであったが、ペリーの日本来航に至るまで、日本の土壤に蒔かれて来た十九世紀の西洋科学の種子は、この「新元会図」に描かれた会堂の中に見出すことができる。会堂に列席した人物は、この国の変革を準備していることには気付いていなかったが、彼らが正道、すなわち合理性の道を歩んでいることは認識していた。西洋科学が日本に根を下ろした、この一事については会堂の全列席者は確信していたのである。この国の

人々がそれに気付くのは時間の問題であった。早稲田大学図書館所蔵の玄沢のこの遺品が、1994年、重要文化財の指定を受けたのは、おそらく上記のような事実が認められたためであろう。

注

1. 庭園の地図については、朝倉治彦『江戸城下変遷絵図集』（原書房 1985）、4巻、29-31頁を参照。
2. 関連史料、林復斎『通航一覽』（清文堂出版）第八巻、131-157頁。さらに、吉野作造『露国帰還の漂流民幸太夫』（文化生活研究会、1924）並びに、木崎良平『光太夫とラクスマン：幕末日露交渉史の一側面』（刀水書房、1992）。
3. J. J. B. de Lesseps, *Travels in Kamchatka* (London, 1790).
4. ロシアの使節は、幕府の役人に乗馬用革ケース入りピストル数挺と他に馬具を贈った。これらの品は、前野良沢のよく知られた肖像画に描かれている。木村陽二郎「前野蘭化の自画自賛について」（『日本医史学雑誌』35巻4号、1989）430-438頁所収。
5. 桂川家については、今泉源吉『蘭学の家桂川の人々』全二巻（篠崎書林、1965）を参照。
6. 桂川甫周『北槎聞略：大黒屋光太夫ロシア漂流記』（岩波文庫、1990）。
7. 現在の銀座1丁目。
8. 1730年、仙台藩医、松井寿哲に弟子入りし、漢方医学を学んだ。1734年、江戸に出て、富永従意について蘭学を学んだ。1747年、家長となり以後清庵を名乗る。1755年、『民間備荒録』を著し、藩目付に昇進。安永年間（1772-1781）には、110石の禄を認められた。杉田玄白と書翰を交し、それらは後に『和蘭医事問答』として刊行された。山形敏一「医学者としての建部清庵」（『日本医史学雑誌』23巻2号、1977）206-208頁。
9. 小浜藩、酒井家医師。青茶婆を解剖したことで知られる。この経験から、Kulmus の『解剖図』オランダ語版の優越性を確信するに至り、これを前野良沢（1723-1803）、中川淳庵（1739-1776）、石川玄常（1744-1815）と共同で翻訳することを決意する。これは、1774年に『解体新書』として刊行され、専門的指針としての蘭学の事始めとして広く認められている。杉田玄白、緒方富雄現代語訳『蘭学事始』（好学社、1959）を参照。さらに、杉本つとむ『江戸の翻訳文化をさぐる：解体新書の時代』（早稲田大学出版部、1987）。
10. 杉田玄白、緒方富雄訳『蘭学事始』（築地書店、1941）92頁。
11. 早稲田大学図書館、元特別資料課長金子宏二氏のご援助を賜ったことに謝意

を表します。

12. 複写の初出は、これまで見出し得る限りでは、J. Feenstra Kuiper *Japan en de buitenwereld in de achttiende eeuw* (Nijhoff, The Hague 1921) である。日本では、これまで見出し得る限りでは、大槻磐溪『磐溪先制』（大槻茂雄編、1925）である。「新元会図」について触れ、それが投げかける問題について部分的な解決を提案している著述者は多数にのぼり、一葉の一覧表では収まりきれない。
13. 絶筆は手書きで、上段部中央に確認できる。画讃3。尚、本稿で用いた画讃の番号については、図4を参照のこと。
14. 画讃4。
15. 画讃10。
16. 画讃8並びに画讃12。
17. 画讃9。
18. 同図には十二名の人物による画讃が記されているが、その本文は『早稲田大学図書館月報』12号（1953）で既に紹介されているので、本稿では割愛した。興味のある方はそちらを参照していただきたい。
19. 1802年1月2日。
20. 画讃6。
21. 茅原弘「久居藩における蘭医木村家について」『日本医史学雑誌』17巻、1号、(1971) 29-30頁。
22. 杉靖三郎編『杉田玄白日記鵲斎日録』（青史社、1981）享和二年四月十三日の項を参照。
23. この人物のその他の名称には、南岳、岳山、梅嶺、邕などがあり、伊勢、津の出身で藤堂家の家臣。大槻玄沢並びに司馬江漢の弟子。梅原三千、西田重嗣編『津市史』（津市役所、1971）3巻、137頁。
24. 商館長 J. van der Cruysse『オランダ商館長日記』1737年1月1日。
25. 永積洋子「オランダ正月の起源」（『歴史手帳』2巻3号、1974）、23-26頁。片桐一男「オランダ正月の盛行」、緒方富雄編『蘭学資料研究』（龍溪書舎、1986、21巻、索引付）、19巻、11-16頁。これは、1955-1977年、謄写印刷版で発行された『蘭学資料研究会報告』の復刻版であり、蘭学史における詳細を明らかにする上で価値ある原史料である。
26. 菊池俊彦編『江戸科学古典叢書』（恒和出版、1980）所収、『紅毛雑話』、『蘭畹摘芳』31巻、30頁。玄沢と中良については石上敏「森島中良と大槻玄沢：江戸蘭学者の交友の一斑」（『洋学資料による日本文化史の研究』6巻、1993）、15-38頁を参照。
27. 例えば、菊池俊彦編『江戸科学古典叢書』（6巻、1979）所収の『蘭説弁惑、

- 磐水夜話』掲載のナイフ、フォーク、スプーン、グラスの挿絵を参照。挿絵は、「芝蘭堂新元会図」の制作者と同一人物、市川岳山によって描かれたものである。
28. オランダ用語の日本人による書写表記は本稿では省略したが、苦心して克明に記されており、いまなお完全に確認できる。
29. 『紅毛雑話』31-34頁。
30. 早稲田大学図書館、特別資料室所蔵。
31. これは、大通詞吉雄幸作の居住地である。後述のように、工藤兵助が玄沢を幸作に引き合わせたものである。
32. 洋学史研究会編『大槻玄沢研究』（思文閣、1991）13頁、佐藤昌介「大槻玄沢小伝」に引用されている。1788年、玄沢は『蘭学階梯』一部を吉雄幸作に贈呈し、厚遇に対する返礼ができた満足している。『蘭学階梯』はこの年、吉雄がオランダ商館長を伴って江戸に出府したときに、世に出されたものである。
33. ハイステルは、フランクフルトに生まれ、ギーセン、後にライデンで医学教育を受けた。1708年に、オランダ軍医に雇用された。1710年には、ドイツ、アルトドルフ大学の解剖学教授に、1720年には、ヘルムシュタット大学の外科学教授に任命された。その著作 *Chirurgie* は1744年、Hendrik Ulhoorn によってオランダ語に翻訳された。オランダ語版は、総頁1176頁から成る2巻本であった。詳細については、石田純郎「ハイステルとユールホーロン」（吉備洋学資料研究会『洋学資料による日本文化史の研究』3巻、1990）、59-77頁を参照。『瘍医新書』については、大鳥蘭三郎「大槻玄沢の『瘍医新書』について」（『蘭学資料研究』5巻、78-81頁、並びに同著者の『『瘍医新書』の研究1-4』（『日本医史学雑誌』23巻（1977）、1号、1-12頁、2号、481-485頁、24巻（1978）、1号、64-71頁、3号、252-257頁を参照。
34. 片桐一男「大槻玄沢の長崎遊学と阿蘭陀通詞」（『日本歴史』349号、1977、1-18頁。
35. 『蘭学事始』114頁。
36. 1785年当初、仙台藩当局は玄沢と一関藩（仙台藩支藩）の玄沢の上司に対して、玄沢を仙台藩医に任命する意向を伝えた。江戸から仙台に移ることを望まなかった玄沢は巧みに交渉して江戸にとどまり、同藩の所領地以外の場所に土地を借り受けることを許可された。佐藤昌介、1991、9-11頁。紹介状については、同じく佐藤昌介16頁を参照。
37. Frits Vos, "Forgotten Foibles: Love and the Dutch at Dejima, 1641-1854" *Festschrift für Horst Hammitzsch zu seinem 60. Geburtstag*, Harassowitz, Wiesbaden, 1968, 614-633頁。

38. この著書は、その一部が1794年に刊行されたが、翻訳の全原文を利用できたのは芝蘭堂の塾生のみであった。完全無欠版は、玄沢の死の二年前に当たる1825年に初めて刊行されたからである。もともと、杉田玄白の提言によって『瘍医新書』と題され、四巻本で世に出された。医学の教科書としては、『瘍医新書』は『解体新書』よりもおそらくはるかに大きな影響力を持った。『解体新書』にはまだ誤りも多く、1798年、玄沢によって改訂されることになった。
39. ここでは、緒方富雄氏の「芝蘭堂新元会図の西洋人の画像」『蘭学資料研究』10巻、17-19頁に従った。
40. 中野操「新元会図中の西哲象について」『蘭学資料研究』17巻、157-164頁。
41. 画譜9を参照。
42. 佐藤栄七改訂『日本洋学編年史』1974、275頁。
43. 事実、左向きのハイステルの肖像画は数種類あり、内一点は、越村德基によるハイステルの著作の日本語版『瘍科精選図解』の中で、銅板画によって、1820年に刊行されている。これはハイステルの著作の口絵の肖像画を模写したものである。中野操「ハイステルの画像について」『蘭学資料研究』21巻、208-210頁。
44. 肖像画が実際に芝蘭堂の壁に掛けられていたとの仮定に基づいて考えている。森屋正氏は、岳山がハイステルの *Heelkundige Onderwijzingen* のオランダ語版から直接写し取ったものと仮定しているが、これは翻訳者 Hendrik Ulhoorn の肖像をドイツの著名な医師のものと誤認したのである。「新元会図」にはっきりと見られる三個のボタンは Ulhoorn の肖像画でも同様、この説明の確実性を高めるものとなっている。ともかく、肖像画がハイステルを描く意図をもって行われたことは明白である。森屋正「『芝蘭堂新元会図』の異人象について」『日本医事新報』2864号（1979）65-66頁。
45. 大槻は、一角鯨に関する部分については次の各書から採って翻訳したと述べている。John Jacob Woyts (1671-1709) *Gazophylacium medico physicum, of schatkamer der genees- en natuurkundige zaaken* (1741). John Jonston (1603-1675) *Naeukeurige beschryving van de natuur der vier-voetige dieren* (1661). Rembert Dodoens (1517-1585) *Cruydt boeck* (1554, 1644, 1664). Noel Chomel (1632-1712), *Huishoudelijk woordenboek* (1743). これらの研究については、矢部一郎「大槻玄沢の西洋薬物学、博物学への関心と受容紹介」『大槻玄沢の研究』193-199頁を参照。
46. 江戸時代を通じて、多数の著作者が一角鯨の効用について書いている。宗田一編『六物新志稿』、『一角纂考稿』、『江戸科学古典叢書』32巻（恒和出版）8-9頁。

47. Frank Lequin, ed., *The Private Correspondence of Isaac Titsingh* (Gieben, Amsterdam, 1990-1992)、2巻、書簡294、755頁「ティツィングよりゼラー宛書簡」1801年5月14日、「ヘンリー・ゼラー船長宛覚え書き」に「日本における私貿易の最高の品目は一角鯨である。1ポンド当たり、30-40 stuyvers をもたらす。それに、私が日本を離れる頃には、一斤当たり小判六枚、すなわち26 rixdollars をもたらした」とある。
48. 宗田一「大槻玄沢『蘭畹摘芳』について」、『日本医史学雑誌』33巻1号(1987)。73-75頁。
49. 『江戸科学古典叢書』32巻、1980、126-127頁。
50. 佐藤昌介、1991、18頁。
51. 漢字の組合せは多岐にのぼる。例えば、「芝蘭堂」の名称も、最初は清時代の学者范必英が研究室の呼称として造語したものである。「芝」の漢字は、吉兆を含蓄し、またある種の珍しい茸を意味している。「蘭」は珍しい繊細な花であり、特別の気候条件の下でしか見られない。それに、「阿蘭陀」を記載するのに使われる。合成語句「芝蘭」はさらに「芝蘭玉樹」のように、しばしば「親が誇りとする子供」の意でも用いられた。しかし、中には「しらん」は「しらぬ」の短縮形であるとする人もあり、「しらんどう」は「知らぬ堂」の意、との説も認めなければならない。
52. 『国史大辞典』7巻、751頁。
53. 玄沢の原稿や刊行著作物については、吉田厚子「大槻玄沢の著訳書一覧」『大槻玄沢の研究』322-360頁を参照。さらに、佐藤栄七「大槻玄沢の著訳について」『蘭学資料研究』8巻、125-133頁を参照。
54. 大槻如電『日本洋学編年史』（佐藤栄七改訂、綿正社、1974）257-258頁。大槻文庫については、『磐溪追遠展覧会：大槻文庫書目』（私家版、1908）。
55. 菊池俊彦『蘭説弁惑、磐水夜話』、『江戸科学古典叢書』17巻（恒和出版、1979）。
56. 『蘭畹摘芳』の原稿は、後にほかの塾生、長谷川宗僊、森宗澤、長倉道輔、大矢林澤によって、1817年に刊行の運びとなった。その頃には、同書に植物学の情報のみならず、治療法、工業製品、西洋の機械装置、翻訳法、ゴシップ等の項目も設けられた。菊池俊彦『紅毛雑話、蘭畹摘芳』、『江戸科学古典叢書』31巻、1980。
57. 江戸時代の蘭和辞典に関する不動の著作として、杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開』全5巻（早稲田大学出版部、1976-1982）。『ハルマ和解』については、特に第3巻を参照。
58. 江戸時代には、蘭和辞典のみが、このようなラベルを貼付していた。杉本つ

- とむの著作中のハルマとマーティンの日本語版複写の図解参照。F. Halma, *Nederduits Woordenboek* 第3巻並びに *Kramer Kramer's Woordentolk*, 1854の口絵の写真参照。さらに、第2巻996頁、第3巻110、581、595、596、654、655、690、714、927各頁の写真がすべてそのようなラベルを貼付した辞典を示している。
59. 中川淳庵は1776年にすでに死去している。
60. この点に関してご教示を賜った宮地正人教授に謝意を表したい。光太夫のその他の筆跡事例については、鈴鹿市教育委員会編『鈴鹿市史』、1983、2巻、681、683頁、または、鈴鹿市教育委員会編『大黒屋光太夫帰国二百周年記念展、展示目録』1993参照。
61. 『紅毛雑話』、『江戸科学古典叢書』31巻、227頁。
62. 上着については、『江戸科学古典叢書』31巻、208頁を参照。帽子については、同、204頁を参照。パイプはロシアからの舶来品である。『北槎聞略』355頁参照。この人物は何かの芝居をしたかのような身なりである。この人物を確定するに至っていないが、おそらく玄沢の弟子の一人で、オランダ人に扮するには最適の、大柄な人物であろう。
63. 同書には、'Ik wensch U goeden dag mynheer' (=今日は、あなた様にとってよき日となりますように)。あるいはその他、役に立つ語句、ローマ字母の説明、儒教の範疇に合わせたオランダ語の基本語彙などを織り混ぜて所載している。
64. 昌綱については、村上勇『朽木昌綱公事蹟』（京都府立福知山中学校、1935）を参照。
65. 昌綱には、三冊の著作がある。『和漢古今錢貨鑑』、『西洋錢譜』1787、西洋地理に関する著作、『泰西輿地図説』17巻で、第三著は荻野孔平信敏の序文をつけ、1788年に刊行された。
66. 松村明他編『洋学』（日本思想体系 64）岩波書店、1976、1巻337頁。大槻磐水『磐水存響』、私家版として1912年刊行。
67. 沼田次郎氏がその著書「蘭癖大名朽木昌綱伝拾遺」（『日本歴史』500号、1990）34-37頁で展開しているように、朽木には、ヨーロッパ世界地理に関する著作があるという理由で、幕府が特に朽木に対してそのような行動を禁じたと考える必要はない。他の蘭学者、特に、大槻玄沢は事実1794年と1798年の両度にわたり、オランダ人を訪問することを許可されており、彼ら蘭学者は、朽木よりはるかに多数の著作物をすでに刊行していたのである。
68. 「昌綱のティツィング宛書簡」Lequin、1巻、書簡番号1、2、14、20、34、52は全て江戸発信のものである。その分析については、沼田次郎「蘭癖大名朽

- 木昌綱のイザアク・ティツィング宛書翰について」、『日本歴史』528号、1992、48-65頁を参照。「ティツィングの昌綱宛書簡」、Lequin 書簡番号1巻201、2巻216、227、237、249、250、255、256、267、271、272、281、287、291。「新元会図」中の人物の中で、ティツィングは桂川甫周とも書簡を交わしていた。ティツィングの中川淳庵宛、1786年3月10日付ベンガル発信の書簡には、玄沢についても興味深い記述がある。「玄沢先生によりしくお伝えくださるようお願いします。また、先生もたまには私のことをご配慮いただきたいものです。」Lequin 2巻、564頁。
69. 昌綱については、沼田次郎「丹波福知山藩主朽木昌綱の蘭学研究について」『日蘭学会会誌』17巻、2号、1993、1-18頁を参照。昌綱は1800年に大名を引退し、出家して近江入道と称した。『寛政重修諸家譜』7巻、152-153頁。1802年5月死去の二箇月前、江戸にオランダ人を訪ねる最後の機会に恵まれた。沼田次郎、1990、37頁。
70. 昌綱も画讃10を書いた可能性の最も高い人物に擬せられる。
71. 建部亮策は、1782年、杉田玄白の養子となる。1784年、小浜藩より三人扶持の禄を受ける。1787年、遊学のため京都に出て、翌年、江戸の儒学者柴野栗山の学塾に入籍する。1793年、玄白の娘、扇と結婚し杉田家の嗣子となる。1807年、家督を継ぐ。1794年、長男誕生。1795年には、実父と養父の交換書簡を『和蘭医事問答』として、玄白の序文をつけ、2巻本で刊行した。「杉田玄白百四十年忌記念特集号」『日本医史学雑誌』8巻3・4号（1958）、並びに、『洋学史辞典』（日蘭学会、1984）、369頁を参照。
72. 酒井恒「前野良沢と『解体新書』」『日本医史学雑誌』33巻1号、1987、18-20頁。
73. 木村陽二郎、430頁。『国史大辞典』13巻、19頁。
74. 岩崎克巳『前野蘭化』（私家版、1938）。
75. 杉靖三郎『杉田玄白日記鶴斎日録』を参照。玄沢の日記『官途要録』も、1795年1月1日の記載項目があるべき部分が紛失している。『早稲田大学蔵資料影印叢書、洋学篇 第一期』早稲田大学出版部、1994、4。
76. 『鶴斎日録』384頁。しかし、「詮議」は「幹儀」の誤写であろう。「幹儀」は「軀幹儀」の短縮形で、厳密には良悦が所持していたことで知られる人体模型を指している。この点に関してご教示を賜った横山伊徳氏に謝意を表したい。
77. その他に関しては、『鶴斎日録』には医学や軍事に関する討論集団、詠詩会、大名屋敷での宴会、さらには往診の依頼が引きも切らない医者、江戸を巡る単調な往診記録に至るまで、多種多様な会合、集会に触れた記載が頻出している。玄沢自身についての言及は、1788年までは頻繁にあるが、その後は、ただ

一例を除いて終っている。

78. 『鶴斎日録』天明七年一月十三日、並びに同十四日。
79. 同上、同年二月五日、または十日。
80. 同上、同年九月二十一日。
81. 同上、同年十一月二十二日。
82. 同上、八年一月七日、同十七日。
83. 同上、享和三年四月二十一日。
84. 杉本つとむ、1978、3巻、616頁。
85. 他の三名は、伊勢出身の安岡玄真（1769-1834）、阿波出身の橋本宗吉（1763-1836）、常陸出身の山村才助（1770-1807）。
86. 杉本つとむ、1978、3巻、616頁。
87. James Legge 訳 *The Chinese Classics* 4巻、*She King*、257-258頁。
88. 蘭学者はまだ太陽暦を完全に修得していなかった。従って、同図の太陰暦の日付のみが信頼するに足るものである。同図のそれらを再換算すると、数箇所（画讀1、6、9）に誤りが見られる。
89. この蘭書は、Johannes de Gorter, *Gezuiverde Geneeskunst of Kort Onderwijs der Meeste Inwendige Ziekten* (Amsterdam, 1744、1762、1773)。当書は玄随によって『西説内科撰要』として翻訳され、1792-1793年に18巻本で刊行された。
90. 両名は、1797年の新年用に編まれた早稲田大学図書館所蔵「芝居見立番付」に、それぞれ太陽並びに月として登場している。
91. 市川、荻野、及び高麗屋は当時の歌舞伎役者。東海夫人は中国産の軟体動物でもある。『日本洋学編年史』289頁。
92. 後年、石井恒右衛門は「庄助」として知られる。
93. 『日本洋学編年史』285頁。
94. 同上。
95. 森納「稲村三伯と『三伯稻荷神社』そのほかについて」『日本医史学雑誌』34巻2号、1988、203-204頁。
96. 緒方富雄「杉田玄白の女『八百』」『日本医史学雑誌』13巻、4号、1968年、3頁。
97. 『洋学史辞典』79-80頁。
98. 1799年の蘭学者「相撲番付」で、甫説は西前頭二枚目に位置づけられている。
99. 早稲田大学特別資料室所蔵。『早稲田大学資料影印叢書』16巻に写真版がある。
100. カネールはシナモンを意味するオランダ語で、蘭学者の間では、桂川甫周のあだ名として知られる。シナモンは「桂」の意味であり、桂川の頭文字である。

101. 佐藤昌介『洋学史研究序説』岩波書店、1964、111頁。
102. 岡村千曳「大槻玄澤『晩港漫録』」、『早稲田大学図書館月報』19号、1954、47-50頁。
103. 同上、48頁。
104. 同上。
105. 『蘭学階梯』、松村明『洋学』上、376-377頁。佐藤昌介『洋学史研究序説』、1964、114頁。
106. 岡村千曳『紅毛文化史話』創元社、1951、52-53頁。
107. 江漢の肖像画には、すべてこの特徴があらわれている。さらに、『国史大辞典』7巻、42頁。
108. 樋口弘「蘭学者の遺跡を訪ねて」『蘭学資料研究』21巻、162頁。
109. 中野操『ハイステルの画像』『蘭学資料研究』21巻、209-210頁。中野氏は1973年、茅原元一郎所有で寛政元年（1789年）の日付のあるもの、神戸南蛮博物館（現神戸市立博物館）の他のものについて述べている。
110. 芝蘭堂に入塾した事が年次別に確認できる次掲の人物中の誰かであろう。佐野立見、堀内林哲、宮崎元長（いずれも寛政元年入塾）、山村才助（同二年同）、蓮沼陽助、河野意仙、高屋東助、岸本雲文（同四年同）、星野良悦（同五年同）、田崎哲郎『「芝蘭堂」』『象先堂』門人都道府県別一覧、有坂隆道編『日本洋学史の研究』7巻、創元社、1985、251-271頁。
111. 1794年6月1日、2日。この特権を受けた医者には、桂川甫周、森島中良、大槻玄沢、宇田川玄随、江馬元恭、栗本瑞見、石川玄常、佐野有千、渋江長伯がいた。「大槻玄沢『西賓対晤』」『日蘭学会会誌』2巻1、2号、1978。並びに、津田進三「石川玄常について」『日本医史学雑誌』29巻2号、1983、144頁。
112. 現岐阜県、大垣藩医。漢方医として訓練を受けたが、46歳のとき江戸に出て、1792年、杉田玄白と前野良沢に弟子入りした。1795年大垣に初めて蘭学塾を開いた。『洋学史辞典』94-95頁。画讀5を参照。
113. 江馬は蘭学者として蘭斎と称した。仮に彼が前野良沢の隣りに座しているとすれば、すべて「蘭」で始まるあだ名を持つ別の人物群を形成することになる。すなわち、蘭癖（朽木昌綱）、蘭化（前野良沢）、蘭斎（江馬元恭）が、集団で座っている前野良沢の弟子たちと、玄沢、昌綱、元恭とそれに石川玄常を含むより大きな人物群の中に、小集団を形成していることになる。
114. 仙台藩主伊達宗村の第八子。1786年に、堀田正富の養子となり、その娘と結婚した。1788年、近江国内の堀田家の領地を継承した。1789年、大組頭に任命され、1790年若年寄の一員となる。寛政の改革にも一役を担い、1807年のロシア船による被害調査のため松前に派遣された。『国史大辞典』12巻、765頁、並

びに『寛政重修諸家譜』11巻、9頁。

115. 横山伊徳氏にご指摘いただいたように、司馬江漢の1792年3月22日付、並びに同4月30日付、二通の書翰の中で、江漢は松平定信の知遇を巡って、大槻玄沢と争った形跡が窺える。中野好夫『司馬江漢考』新潮社、1986、196-200頁。
116. 画讃4を参照。

(Reinier H. Hesselink 北アイオワ州立大学準教授)

(やばし あつし 岐阜済美女子高等学校教諭)

早稲田大学図書館主幹 眞谷会 啓吉

早稲田大学図書館 眞谷会 啓吉